日の出山窯跡群Ⅱ



序文

多賀城跡調査研究所では、特別史跡多賀城跡の継続的調査とともに東北古代史を多角的に研究するため、多賀城と関連する県内の城柵・官衙遺跡、生産遺跡等の発掘調査を、多賀城関連遺跡発掘調査事業として年次計画に基づき実施している。

この方針のもと、当研究所は多賀城関連遺跡発掘調査事業第6次5ヵ年計画4年次目の 平成14年度から、大崎地方に所在する多賀城創建期の窯跡群の内容を解明することを主 目的とする調査に着手し、東松島市亀岡遺跡、大崎市木戸窯跡群・六月坂遺跡、色麻町日 の出山窯跡群の発掘調査を実施してきた。その結果、各遺跡の詳細が捉えられるととも に、陸奥国府多賀城跡との関連や東北古代史を考えるうえでも貴重な成果が得られた。

第8次5ヵ年計画の1年次目にあたる今年度は、昨年度に引き続き色麻町日の出山窯跡群F地点の発掘調査を実施し、F地点北半の東·西斜面で窯跡を確認した。特に西斜面では窯跡のほか、工房とみられる竪穴住居跡、平場跡などを発見し、昨年度の成果とあわせて西斜面の窯場の様相が明らかになるとともに、各遺構や当時の地形が良好に保存されており、日の出山窯跡群のなかでも極めて貴重な場所であることが判明した。

本書は、その日の出山窯跡群F地点第2次発掘調査の成果を収録したものである。多賀城創建期の窯跡群の研究資料として活用され、遺跡の保護に寄与できれば幸いである。

刊行にあたり、日頃からご指導を賜っている文化庁と多賀城跡調査研究委員会の諸 先生方、調査共催を快諾していただいた色麻町教育委員会、発掘調査にご協力いただい た地権者や調査参加者をはじめとする多くの方々と機関に心から感謝申し上げる次第 である。

平成22年3月

目 次

I. 多賀城関連遺跡発掘調査事業の計画
1. 事業の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1頁
2. 第8次5ヵ年計画について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1頁
Ⅱ. 日の出窯跡群F地点第2次調査
1. 遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2頁
2. 調査の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2頁
3. 調査の経過と方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4頁
4. 発見した遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6頁
5. 考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31頁
6. まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41頁
註·引用参考文献
写真図版
例言

1. 本書は平成21年度に実施した多賀城関連遺跡発掘調査事業(日の出山窯跡群F地点第2次調査)の成 果を収録したものである。

- 2. 調査は多賀城跡調査研究委員会の指導のもと年次計画に基づいて実施している。
- 3. 日の出山窯跡群F地点第2次調査の要項は下記のとおりである。

所 在 地 宮城県加美郡色麻町大字堰堀20

調査指導 多賀城跡調査研究委員会 (委員長 須藤 隆) 宮城県教育委員会 調查主体 (教育長 小林伸一) 色麻町教育委員会 (教育長 菅原利之) 調査共催 調査担当 宮城県多賀城跡調査研究所 (所 長 後藤秀一)

後藤秀一・古川一明・三好秀樹・吉野 武・関口重樹・廣谷和也

調査期間 平成21年5月25日~7月23日

対象面積:約4.425㎡ 発掘調査面積:約620㎡ 調査面積

調査作業員 佐々木喜美男·鈴木祐一·高橋修逸·田中 幸·行澤良雄 整理作業員 木村 歩・佐久間順子・柴田とみ子・高橋里枝・只木一美

- 4. 本遺跡の測量については世界測地系第X系座標に準じている。
- 5. 土色は『新版 標準土色帖17版』(小山正忠・竹原秀夫1996:日本色事業株式会社)を参照した。
- 6. 遺物の実測図は瓦を1/6、土器を1/3で掲載した。また、瓦の分類・型番は『多賀城跡 政庁跡 本 文編』(宮城県多賀城跡調査研究所1982)、須恵器坏の分類は『日の出山窯跡群 I 』(宮城県多賀城 跡調査研究所2009)に依拠した。
- 7. 宮城県多賀城跡調査研究所刊行の文献は多賀城跡に係わるものを(宮多研1982)、多賀城関連遺跡 に係わるものを(宮多研2009)と略記した。
- 8. 調査で得られた資料は宮城県教育委員会で保管している。
- 9. 本書は宮城県多賀城跡調査研究所の所員全員の検討をへて吉野 武・廣谷和也が執筆・編集した。

1. 多賀城関連遺跡発掘調査事業の計画

1. 事業の目的

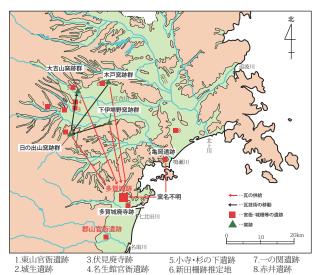
当研究所では、昭和49年以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の調査研究と併行して、宮城県内に所在し、 多賀城と密接に関連する城柵官衙遺跡と生産遺跡の調査研究を継続的に実施している。この事業は、 古代の陸奥国、及び出羽国を統治するうえで中心的な役割を果たした多賀城を多角的に調査・研究す るために、多賀城に関連する遺跡の解明とその保存・活用を目的としている。

2. 第8次5ヵ年計画について

調査は、多賀城跡調査研究委員会の指導に基づき5ヵ年ごとに計画を立てて実施してきた。第8次5ヵ年計画では、3年次目までは前回の5ヵ年計画に引き続き大崎平野に分布する多賀城第 I 期の窯跡群の発掘調査を実施し、4年次目から同平野の北辺に所在する城柵官衙遺跡の発掘調査に移行することにしている(表1)。

前者は多賀城第 I 期の窯跡群の実態と瓦·須恵器 生産の様相を把握することによって窯跡群と多賀城 との関連や当時の工人集団とその体制、社会的背景 などの諸問題を解明することを主眼とし(第1図)、後 者は大崎平野北辺に東西に連なるように分布する城 柵官衙遺跡の具体的な内容・実態を把握することを 目的としている。

第8次5ヵ年計画1年次目の平成21年度は、昨年度 の色麻町日の出山窯跡群F地点南半の発掘調査に続 いて、F地点北半の西斜面を中心に発掘調査を実施 した。事業費は2,994千円(国庫補助率50%)である。



第1図 第1期多賀城への瓦の供給と瓦技術の移動

年次	年 度	遺跡名	調査内容	対象面積(㎡)	発掘面積(㎡)	備考
1	平成21年度	日の出山窯跡群	F地点第2次発掘調査	4,425	620	日の出山窯跡群Ⅱ(本書)
1	十成21千及	(城柵官衙遺跡分布調査等)	涌谷町城山裏土塁跡発掘調査協力			
9	平成22年度	日の出山窯跡群	F地点第3次発掘調査	2,000	900	
	十成22年及	(城柵官衙遺跡分布調査等)				
2	平成23年度	大吉山瓦窯跡	発掘調査	(未定)	(未定)	多賀城第Ⅰ期窯跡群の総括
)	十成23年及	(城柵官衙遺跡分布調査等)				
4	平成24年度	(城柵官衙遺跡発掘調査等)	発掘調査	(未定)	(未定)	平成22・23年度に対象遺跡を選定
5	平成25年度	(城柵官衙遺跡発掘調査等)	発掘調査	(未定)	(未定)	第8次5ヵ年計画の総括

※平成21年度は実績。平成22年度以降は計画。

表1 第8次5ヵ年計画

Ⅱ. 日の出山窯跡群F地点第2次調査

1. 遺跡の概要

日の出山窯跡群は宮城県加美郡色麻町四竈字東原他に所在する(第2図)。遺跡は色麻町の中心部から約4km南東の通称「日の出山」周辺に位置し、標高50~70m前後の砂礫ないし粘土を主体とした新第三紀層によって構成された丘陵上に立地する。

本遺跡は、古くから陸奥国府多賀城の第 I 期の瓦等を生産した窯跡群として大崎市下伊場野窯跡群・木戸窯跡群・大吉山窯跡群とともに周知されている。その製品のうち瓦は多賀城跡のほか、色麻町一の 関遺跡、加美町城生柵跡・菜切谷廃寺跡・東山官衙遺跡、大崎市名生館官衙遺跡・伏見廃寺跡などの大崎 平野西部の城柵・官衙・寺院等に供給され、須恵器は加美町米泉館山横穴墓群、色麻町色麻古墳群、大 崎市山畑横穴墓・混内山横穴墓など群集墳や横穴墓群に出土例がある(註1)。

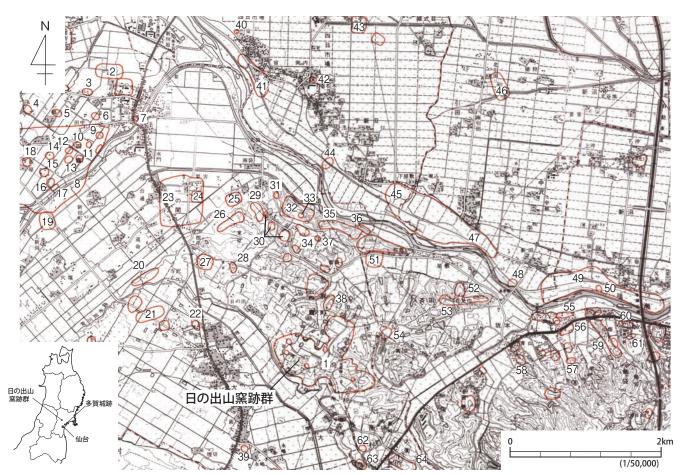
本遺跡の範囲は東西約1.5km、南北約1kmで、窯跡群は現在 $A\sim F$ の6地点で捉えられている(第3図)。このうち発掘調査が実施されたA地点(宮城県1970)とC地点西部(色麻町1993)、磁気探査と試掘調査が行われたF地点(色麻町1990)では内容が一部明らかになっており、A地点は昭和57年(1982)に国指定の史跡とされ、その後整備されている。一方、 $B\cdot D\cdot E$ 地点は瓦や須恵器等の遺物が採取できるものの、後世の開発等による地形の改変のために窯跡等の多くが壊されたとみられており、詳細は不明である。

2. 調査の目的

当研究所による日の出山窯跡群の調査は、第7次5ヵ年計画4年次目にあたる一昨年度のA地点試掘調査から開始し、昨年度は北から南に「く」字状に延びる丘陵上に立地するF地点南半を調査した。これらの調査の結果、A地点の史跡指定地と尾根を挟んだ北斜面、F地点南半の東斜面には窯跡に関わる遺構がみられないこと、F地点南半の西斜面では工房跡とみられるSI1竪穴住居跡付近がF地点の工房域の南限と考えられることなどの成果を得ている(宮多研関連2008・2009)。

今年度は、F地点の全貌把握にむけて丘陵北半を対象とし、昨年度に遺構を検出した西斜面を中心に第2次調査を実施することとした。また、以前に行われた磁気探査と試掘調査では東斜面でも窯跡の存在が指摘されていることから、実態を確認する調査を行うことにした。

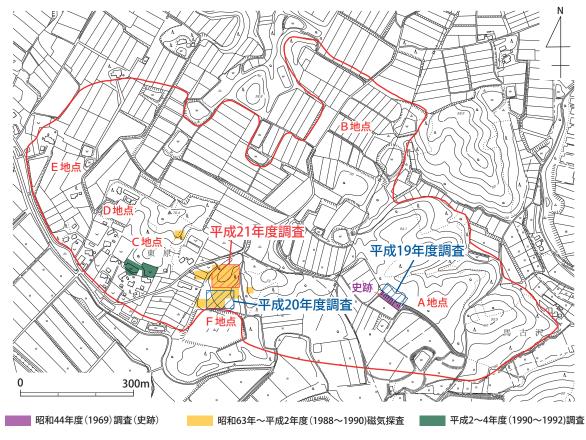
なお、丘陵北半の地形と現況は昨年調査した南半と概ね同様であるが、西斜面には窯跡や竪穴住居跡などの遺構とみられる窪みが比較的視認できる状況で点在している。また、東斜面では斜面が一部東側に張り出した場所がある(第4図)。



※宮城県遺跡地図(宮城県教育委員会1998)から作成

No.	遺跡名	種 別	時 代	No.	遺跡名	種 別	時 代	No.		種 別	時 代
140.	AS 100 -11	<u> </u>	10	23	一の関遺跡	城柵跡·寺院?	奈良	- 14	原江遺跡	散布地	古代・中世
1	史跡日の出山窯跡群	窯跡	奈良	24	要害遺跡	散布地	旧石器·弥生·古墳·奈良	10	/// [11/65/9/]	大崎市	LIV IE
2	本郷遺跡	散布地	古代	25	真山館跡	散布地·城館	平安・中世	46	引田遺跡	散布地	古墳中
3	滝本B遺跡	散布地	古代	26	根岸遺跡	散布地	縄文前·弥生·古代	-	堤根遺跡	散布地	古墳中・古代・中世
4	荒井遺跡	散布地	古墳後	27	愛宕山遺跡	散布地	古代	-	中沢遺跡	散布地	古墳中
5	西昌寺遺跡	散布地	縄文·古代	28	愛宕山窯跡	窯跡	奈良	49	舟場遺跡	散布地	古墳·奈良·平安·中世
6	田中後遺跡	散布地	奈良·平安	29	官林瓦窯跡	窯跡	奈良	50	敷早玉御玉神社跡	神社	平安
7	御山遺跡	円墳·経塚	古墳中·中世	30	東原古墳	古墳	古墳後	51	桜館遺跡	散布地	古代
8	色麻古墳群	円墳·集落	弥生·古墳後·奈良·平安	31	熊野神社古墳	前方後円墳·円墳	古墳	52	花見山遺跡	散布地	縄文·弥生·古代
9	上大坊A遺跡	散布地	弥生·古代	32	鴻ノ巣館跡	散布地·城館	縄文・平安・中世	53	花見山古墳群	古墳	古墳
10	地蔵堂B遺跡	散布地	古代	33	東原古墳	古墳	古墳後	54	斎田野山遺跡	窯跡·散布地	奈良·平安
11	深山遺跡	散布地	古代	34	東原古墳群	円墳	古墳後	55	坂本館山横穴墓群	横穴墓	古墳後
12	地蔵堂A遺跡	散布地	古代	35	県史跡念南寺古墳群	前方後円墳·円墳	古墳中·後	56	青山横穴墓A群	横穴墓	古墳後
13	天王遺跡	散布地	古代	36	根谷地横穴	古墳	古墳後	57	青山横穴墓B群	横穴墓	古墳後
14	新宿A遺跡	散布地	縄文·平安	37	東原夷塚横穴墓群	横穴墓	古墳後	58	青山B遺跡	散布地	古墳
15	新宿B遺跡	散布地	縄文·平安	38	東原横穴墓群	横穴墓	古墳後	59	寺下横穴墓群	横穴墓	古墳後
16	下原A遺跡	散布地	古代	39	前原遺跡	散布地	古代	60	国史跡山畑横穴墓群	横穴墓	古墳後
17	下原B遺跡	散布地	弥生·古代			加美町		61	混内山横穴墓群	横穴墓	古墳後
18	新宿C遺跡	散布地	古代	40	鹿島神社古墳	古墳	古墳			大衡村	
19	上新田遺跡	集落	奈良·平安	41	元宿遺跡	散布地	古代	62	横前窯跡	窯跡	古代
20	土器坂遺跡	散布地	奈良	42	岡東遺跡	散布地	古代	63	吹付B窯跡	窯跡	古代
21	大原A遺跡	散布地	古墳·古代	43	田尻遺跡	散布地	古代	64	吹付窯跡	古代	
22	上新町遺跡	散布地	古代	44	兵庫川原遺跡	散布地	縄文·奈良·平安				

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡(主に古墳時代~古代)



第3図 日の出山窯跡群A~F地点の位置

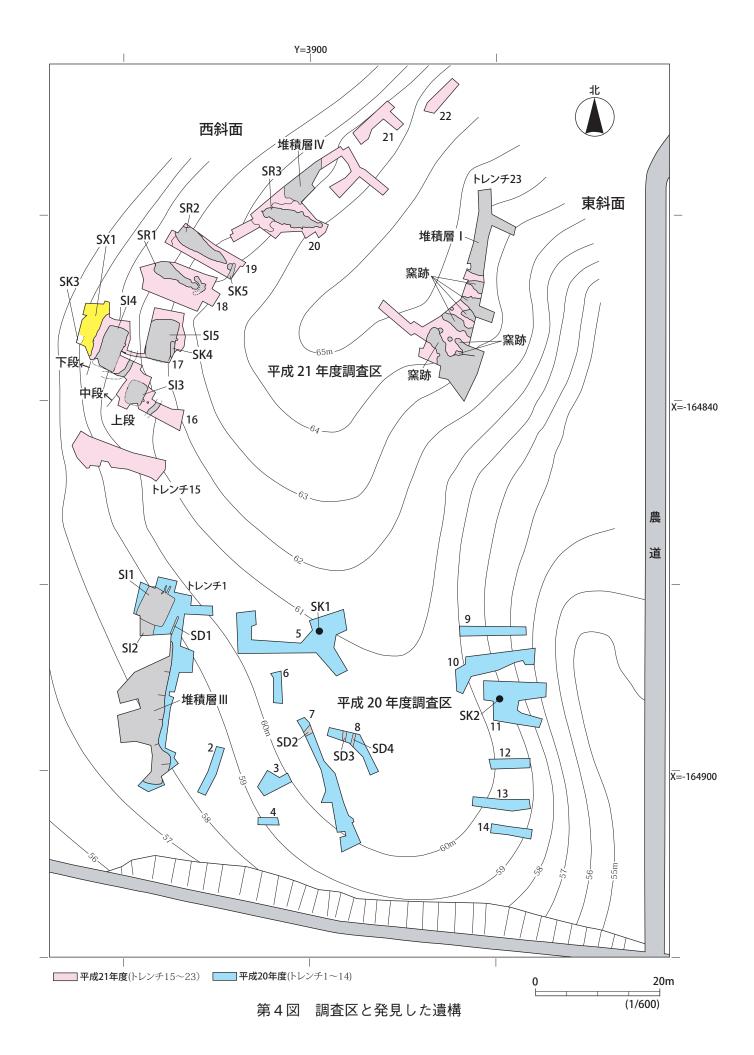
3. 調査の経過と方法

調査は平成21年5月25日に開始した。まず、東西の斜面のうち西斜面地区について遺構とみられる窪みを中心にミニショベルカーで表土剥ぎを行い、次に東斜面地区について斜面が東側に張り出した所を中心に表土剥ぎを行った。その結果、西斜面地区では表土下の地山面で窯跡3基、竪穴住居跡3軒、平場跡1ヵ所などを発見し、昨年度の成果と合わせて窯場のほぼ全貌が捉えられた(第4図)。一方、東斜面地区では表土下の地山面に7基以上の窯跡が密集して存在するのを確認した。設定したトレンチは西斜面地区が8本(トレンチ15~22)、東斜面地区が1本(トレンチ23)の総数9本である。

遺構の調査は計画通り西斜面地区を中心に行い、東斜面地区については検出面での遺構の存在確認 と遺物の取り上げにとどめた。東斜面地区には多数の窯跡が密集して存在することから、詳細な調査 は来年度にあらためて実施する予定である。

発見した遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺20分の1及び200分の1で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。西斜面地区を中心とした遺構の精査は7月14日に終了し、15~17・21日には埋め戻し作業を行った。発掘機材やプレバブ等を搬出し、発掘調査を終了したのは7月23日である。なお、この間、7月8日には報道機関に調査成果を公表し、7月11日には現地説明会を開催して一般に公開した。現地説明会では約120人の見学者を迎え、成果について説明を行った。

また、調査終了後の9月27日には「日の出山窯跡群発掘調査成果速報展」(色麻町教育委員会主催)、 12月12日には「平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会」(宮城県考古学会主催)、平成22年2月27日には 「第36回古代城柵官衙遺跡検討会」(古代城柵官衙遺跡検討会主催)で成果の概要を報告した。



— 5 **—**

4. 発見した遺構と遺物

A. 西斜面地区

厚さ10~30cmの表土を除去し、明褐色砂質土(7.5YR5/6)からなる地山で窯跡3基、竪穴住居跡3軒、 粘土採掘坑跡1ヵ所、平場跡1ヵ所、土壙2基を確認したほか、北側のトレンチ20で黒褐色土からなる堆 積層IVを検出した(第4·5図)。

遺構は堆積層 \mathbb{N} から南のトレンチ $16\sim20$ に分布しており、概ね北側のトレンチ $18\sim20$ に窯跡、南側のトレンチ $16\cdot17$ に竪穴住居跡をはじめとする遺構がある。また、南側の遺構は東西約20m、標高差約3mの場所に斜面上方の東から $SI3\cdot5$ 竪穴住居跡、SI4竪穴住居跡、SK3粘土採掘坑跡とSX1平場跡の順に近接して位置し、それらによって斜面が上·中·下の階段状を呈している。

(1) 窯跡

3基確認した。北側のトレンチ18~20に分布しており、いずれも地下式窖窯である。そのうちSR1・3窯跡について部分的に精査を実施している。

【SR1窯跡】(第5~7図)

トレンチ18に位置する。確認面の標高は60.1~61.9mで、煙出しの斜面上方には外周溝を伴う。本窯跡では南半を中心に精査を実施している。

[形状と規模]煙道から前庭部までを確認した。全長は7.9mである。

窯体は焚口から奥壁に向かって少し狭まる細長い形状で、燃焼部と焼成部の境は平面的には不明瞭であるが、床面の傾斜の違いで区別できる。燃焼部の床面はほぼ平坦、焼成部の床面は平均約23°の比較的直線的な斜面で、奥壁に向かって傾斜がやや強まる。また、奥壁は抉り込まれるように床面から湾曲して立ち上がる。窯体の長さは5.0mで、燃焼部が2.1m、焼成部が2.9mである。幅は燃焼部の焚口付近で1.1m、焼成部で1.0mである。

前庭部は焚口から左右に張り出しており、平面形はやや膨らみのある方形をしている。長さは2.9m、幅は2.8mである。

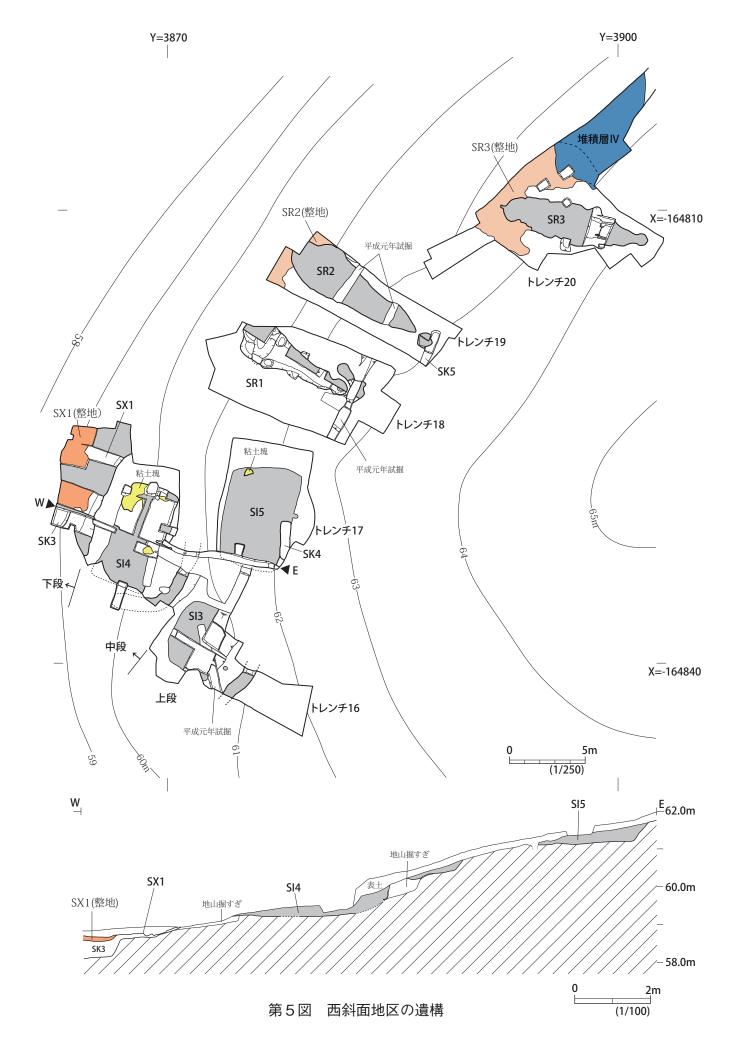
[方向]長軸の中心線で座標の東に対して南に28°振れており、斜面の等高線にほぼ直交している。

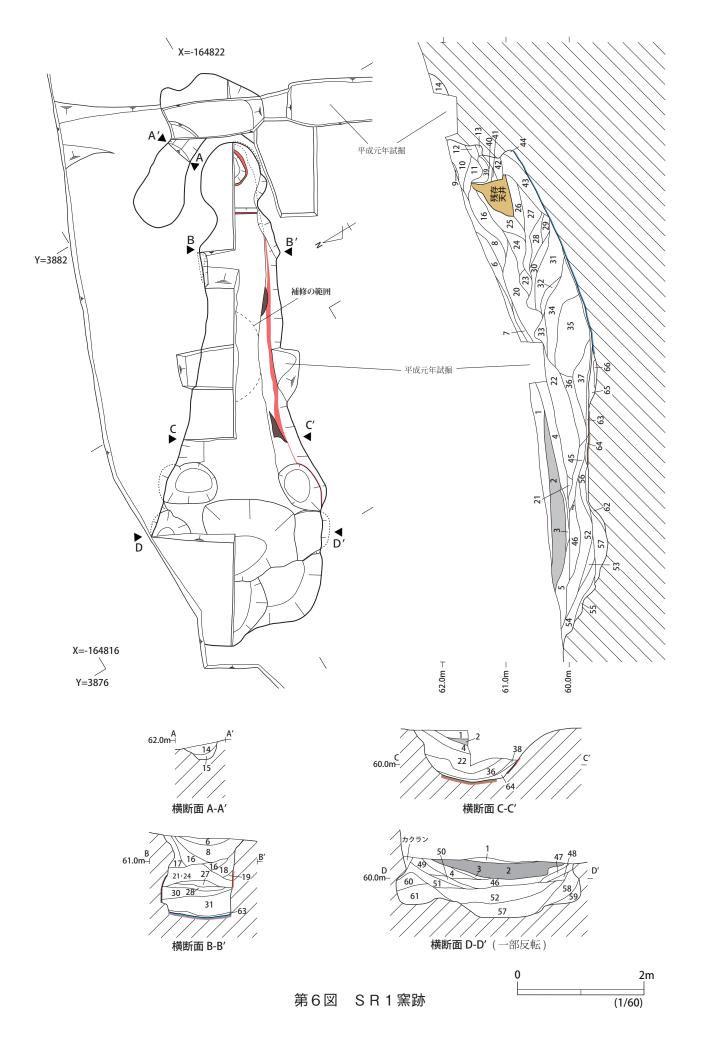
[天井]焼成部の奥で長さ約0.7m残存している。床面からの高さは34~54cmで奥ほど低くなる。

[煙道] 遺構検出面から約30cm掘り下げて確認した。平面形は直径40cm前後の円形で、奥壁やや手前の 天井から直立している。残存する高さは約50cmである。

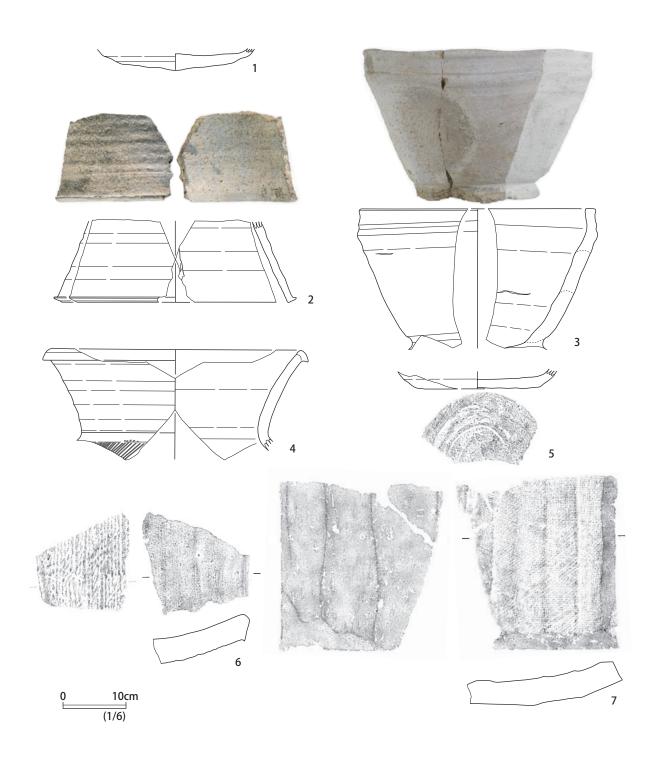
[焼成部と燃焼部]ともに地山の明褐色砂質土層より下位に位置する淡黄色粘土層を床面としており、焼成部は青灰色に還元硬化し、燃焼部は黒褐色に硬化している。また、燃焼部から焼成部にかけては部分的な補修が認められる。その範囲は長さ約1.5m、幅0.4m以上で、床を浅く掘り窪めてにぶい黄褐色土や青褐色土(65・66層)で埋め戻している。側壁は地山の明褐色砂質土層と淡黄色粘土層で、床面と同様に硬化している。

[前庭部]平面形は全体的には膨らみのある方形を呈しているが、焚口前に長さ約0.7m、幅1.0mの平坦





No.	+	色	土性	特 徵 等	
1	黒褐	7.5YR3/1	シルト	10 14 4	
	にぶい黄褐		火山灰	灰白色火山灰	
	黒褐	10YR3/1	シルト		
4	黒褐	7.5YR3/1	砂質シルト		
5	黒	10YR7/1	シルト	瓦を含む	
	褐	7.5YR4/4	シルト		
	褐	7.5YR4/3	シルト	炭を少量含む	
8	明褐	7.5YR5/8	シルト	地山土を含む	
9	褐	7.5YR4/3	シルト	炭を少量含む	
10	褐	7.5YR4/3	シルト	炭を少量含む	
	灰褐	7.5YR4/2	シルト	やや大きめの炭を含む	
12		7.5YR4/3	シルト	小さい炭を少量含む	
13		7.5YR4/4	シルト	焼土を含む	自然流入土
14		7.5YR4/4	シルト	炭を少量含む	
	黄褐	10YR5/6	シルト	小さめの炭を含む	
16		7.5YR4/3	砂質シルト	炭を少量含む	
	にぶい黄褐		シルト	地山土を多く含む。炭を少量含む	
18		7.5YR4/4	シルト	中さか目のと	
19		7.5YR4/3	砂質シルト	炭を少量含む いしょう は、 ここと いこうさ	
	にぶい黄褐 灰褐	7.5YR4/2	シルト	地山土主体。炭を少量含む。 地山土主体。炭を少量含む。22層の土を多く含む	
22		7.5YR4/2 7.5YR4/4		地山土主体。灰を少重古む。22階の工を多く古む 地山土主体。炭を多く含む	
23		7.5 Y R4/4 7.5 Y R4/3	和工員ンルト シルト	地山土ブロック主体。炭を少量含む	
24		7.5 Y R 4/3		地山土主体。炭を少量含む。	
25		7.51 R4/3 7.5YR4/4	シルト	地山土主体。炭を少量含む。	
	青灰色	10BG6/1	-	還元・酸化した土	
27		7.5YR4/3	砂質シルト	炭を多く含む	
	青灰色	10BG6/1	砂質シルト	還元・酸化した土	
	青灰色	10BG6/1	砂質シルト	還元・酸化した土	
30		7.5YR4/3	砂質シルト	炭を少量含む	
	青灰色	10BG6/1	砂質シルト	還元・酸化した土	一 天井崩落土と自然流入
32	褐	7.5YR4/3	砂質シルト	炭を多く含む	土の互層
33	褐	7.5YR4/3	シルト	炭を多く含む	
	青灰色	10BG6/1	砂質シルト	還元·酸化した土。スサを含む	
	青灰色	10BG6/1	砂質シルト	還元·酸化した土。スサを含む	
	褐色	7.5YR4/4		大きめの炭・焼土を多く含む。地山土を少量含む	
	青灰色	10BG6/1	砂質シルト	還元した土	
		5YR5/8	砂質シルト	焼土を多量に含む	
		5YR3/3	シルト	炭を少量含む。	
	暗赤褐	5YR3/3	シルト	炭・焼土を少量含む	
	黒褐	7.5YR3/2	シルト	還元した青灰色土を少し含む	自然流入土(窯体)
42		7.5YR4/4	シルト		
43		7.5YR4/4	砂質シルト	 還元した青灰色土を少し含む	
	灰オリーブ 黒褐	7.5YR3/1 10YR3/1	シルト		
46		10YR2/1	シルト	炭を多く含む	
47	黒褐	7.5YR43/2	シルト		
	暗褐	10YR3/4	シルト		
	黒褐	7.5YR3/2	シルト	炭を多く含む	
50	黒褐	7.5YR3/1	シルト	炭·焼土を少量含む	自然流入土(前庭部)
51	黒	7.5YR2/1	シルト	大きめの炭と焼土を少量含む	
	黒褐	7.5YR3/1	砂質シルト	小礫・炭・焼土を多く含む	
53	黒褐	7.5YR3/2		小礫・炭・焼土を多く含む	
54	黒褐	7.5YR3/3		小礫・炭・焼土を多く含む	
	黒褐	7.5YR3/4		小礫・炭・焼土を多く含む	
56	黒	7.5YR3/1		炭を多く含む。焼土を少量含む	
57	黒	7.5YR3/1	砂質シルト	炭を多く含む。焼土を少量含む	
58		7.5YR3/2	砂質シルト	炭を非常に多く含む	
59		7.5YR4/4	砂質土	大きめの炭・焼土を少量含む。還元した青灰色土ブロックを含む	taili) i
	黒褐	10YR3/2	砂質シルト	炭・須恵器を含む こことままになりです。 ねた のと	掻出し土
	黒褐	7.5YR3/2	砂質土	還元した青灰色土ブロックを含む 豊な小量会は、焼土もタノ会は、	
	明褐	10YR5/8	シルト	炭を少量含む。 焼土を多く含む	
64	黒褐	10YR2/1 10YR2/3	炭層 砂質シルト	粒子細かい 還元した青灰色土ブロックを含む	
	点 にぶい黄褐		シルト	返れした育族色エグロックを含む 瓦、須恵器を少し含む。環元した青灰色土を含む	
	青黒	5BG2/1	シルト	環元した青灰色土主体	一 床面補修埋土
_00	13 200	0202/I	1 - / - 1	NO CONTRACTOR	



No.	出土層位	種類	残存	特 徵	分類	登録番号	箱番号
1	堆積土1層	須恵器坏	底部破片	底径: (8.8) cm。底: ヘラ切→再調整不明。内·外: ロクロナデ。灰黄褐色(10YR6/2)	Ι	R1-1	14897
2	堆積土1層	硯	脚部破片	底径:(18.0)cm。内·外:ロクロナデ。透かし有り。内:褐灰色(10YR6/1) 外:黒色(7.5Y2/1)		R1-2	14897
3	堆積土57層	須恵器鉢	1/4	口径: (18.6) cm。内·外: ロクロナデ。色調:灰色(5Y6/1)		R1-5	14897
4	堆積土57層	須恵器甕	口縁部破片	口径: (20.0)cm。外: 平行タタキ→ロクロナデ。内: ロクロナデ。灰色 (5Y6/1)		R1-4	14897
5	床面補修時埋土	須恵器坏	底部破片	底径:(10.0)cm。底:ヘラ切→回転ケズリ。内·外:ロクロナデ。色調:灰色(5Y6/1)	II	R1-8	14897
6	堆積土52層	平瓦	破片	厚さ:1.9cm。凸:縄叩き。凹:布目→ナデ。側端:ケズリ。色調:灰黄色(2.5Y7/2)	II Ba2	R1-3	14897
7	堆積土63層直上	平瓦	破片	厚さ:1.6cm~2.1cm。凸:ナデ。凹:模骨痕·布目。側端:ケズリ。色調:浅黄色(2.5Y8/3)。	IΒ	R1-7	14897

第7図 SR1窯跡出土遺物

な範囲を残して土壙状の掘り込みが多数認められ、かなり凸凹している。掘り込みは中央部に長軸100~140cm、深さ30~40cmのものが複数あるほか、焚口の両側に長径90cm前後、深さ15cm前後のものが前後に並んで、壁を抉り込んで設けられている。

[堆積土] 64層に細分した。1~25層は天井崩落後の自然流入土で、1層は昨年の調査で堆積層 I とした 土とほぼ同質の黒褐色土、2層が灰白色火山灰層、3~5層が黒・黒褐色土、6~25層が地山土や炭粒を含 む褐色主体の堆積土である。26~37層は青灰・赤褐色土ブロック主体の天井崩落土と自然流入の褐色 土の互層、38~44層は天井崩落前の自然流入土で、地山土を含む褐色主体の土である。45~55層は灰 原から前庭部への自然流入土で、炭や焼土を多く含む黒褐色主体の土である。56~64層は掻出し土や 焼成・燃焼部の床面を覆う炭主体の層である。

[外周溝]煙道の斜面上方に「∩」状に周溝が巡っている。長さ3.3m以上、上幅約50~75cmの溝で、断面 形はU字形、深さは約20cmである。堆積土は地山土主体の褐色土で自然流入土である。

[灰原]前庭部の西側に広がっていると推測されるが、調査区外のため様相は不明である。

[出土遺物]出土量は多くないが、床面補修時の埋土、掻出し土、焼成・燃焼部の床面を覆う炭層直上、 堆積土などから瓦と須恵器が出土している。須恵器の破片資料が比較的多い。

床面補修時の埋土では平瓦、須恵器坏(第7図5)・高台杯・甕が各1点、掻出し土では平瓦 I B類が5点、須恵器坏が2点、鉢が1点(3)、甕が25点、焼成・燃焼部の床面を覆う炭層直上では平瓦 I B類が1点(7)出土している。また、堆積土からは平瓦の I 類が1点、II B類 a 2タイプ(6)が8点、須恵器坏が6点、甕が32点、硯が1点(2)出土している。

【SR2窯跡】(第5·8図)

トレンチ19に位置する。確認面の標高は60.3~62.8mである。

[平面形と規模]確認面での平面形は細長い滴状を呈しており、地山を挟んで東側にほぼ円形の煙道がある。また、前庭部付近の周りには窯の掘削時に排出された土が整地されている。全長は約11.4mで、幅は最も広い前庭部付近で約3.3mである。

[方向]長軸の中心線で座標の東に対して南に33°振れており、斜面の等高線にほぼ直交している。

[煙道]確認面での平面形はほぼ円形で、直径は約90cmである。

[**堆積土**]確認面で1~4層の堆積土を確認した。1層は堆積層 I にあたる黒色土、2層は灰白色火山灰層、3層は黒褐色土、4層は暗褐色砂質土で、いずれも自然流入土である。なお、3·4層の前後関係は不明である。

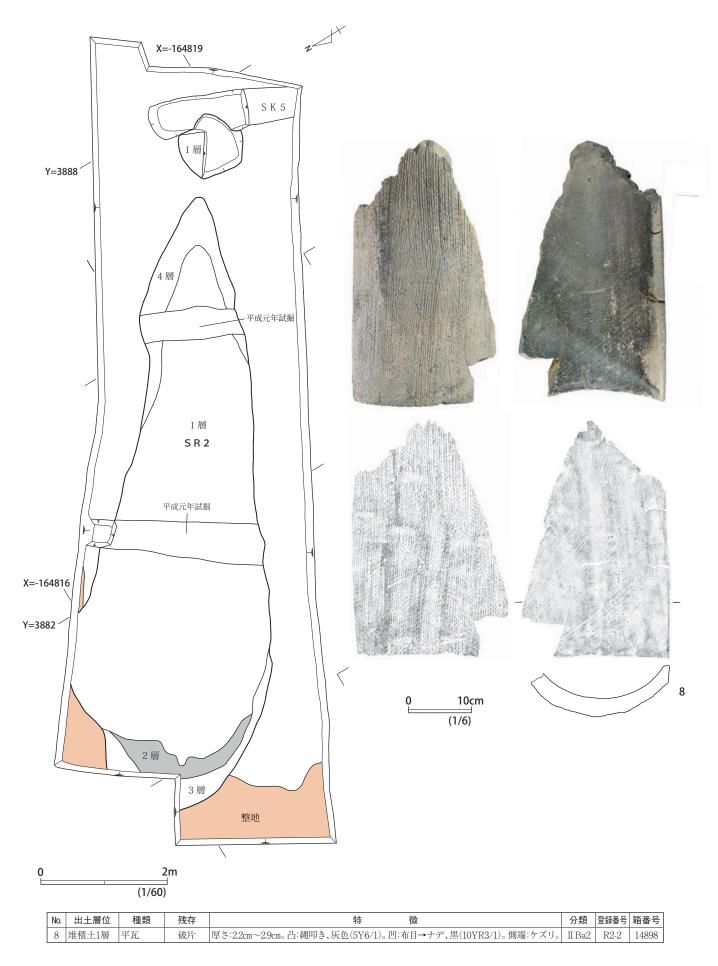
[整地層]窯の掘削時に排出された浅黄色の粘土を整地したもので、広がり方から前庭部の周りに馬蹄 形状に分布するとみられる。

[灰原]前庭部の西側に広がっていると推測されるが、調査区外のため様相は不明である。

[出土遺物] 堆積土から平瓦ⅡB類 a 2タイプが1点出土している(第8図8)。

【SR3窯跡】(第5·9·10図)

トレンチ20の南側に位置する。確認面の標高は62.3~63.9mである。本窯跡では平成元年の試掘トレンチで焼成部を精査した。また、その際の断面観察と西に拡張した部分の精査で、窯跡の廃絶後の窪



第8図 SR2窯跡と出土遺物、SK5土壙

地が2次的に使用された状況を確認した。

[平面形と規模]確認面での平面形は細長い楕円形で、東側の煙道の手前が少し括れている。また、前庭部付近の周りには窯の掘削時に排出された土が整地されている。全長は約10.0mで、幅は最も広い所では約2.7mであり、精査した焼成部では約1.0mである。

[方向]長軸の中心線で座標の東に対して南に13°振れている。斜面の等高線とは直交せず、直交線に対して煙道が北、前庭部が南に振れる。

[煙道]確認面での平面形はほぼ円形で、直径は約80cmである。

[焼成部]地山の明褐色砂質土層より下位の淡黄色粘土層を床面としている。床面は約19°の斜面で、青灰色に還元硬化しており、上面には焼台が多数残存している。確認した焼台はすべて平瓦 II B類 a 2タイプで、①~④は接合する資料である。壁は床面と同じく淡黄色粘土層を壁とし、青灰色に還元硬化している。北壁の残存状況が比較的良好で、天井へ続く部分がループ状に残る所もあり(第9図横断面 B-B')。天井の高さは概ね80~90cmとみられる。

[整地層]窯の掘削時の浅黄色粘土を整地したもので、前庭部の周りに馬蹄形状に分布している。

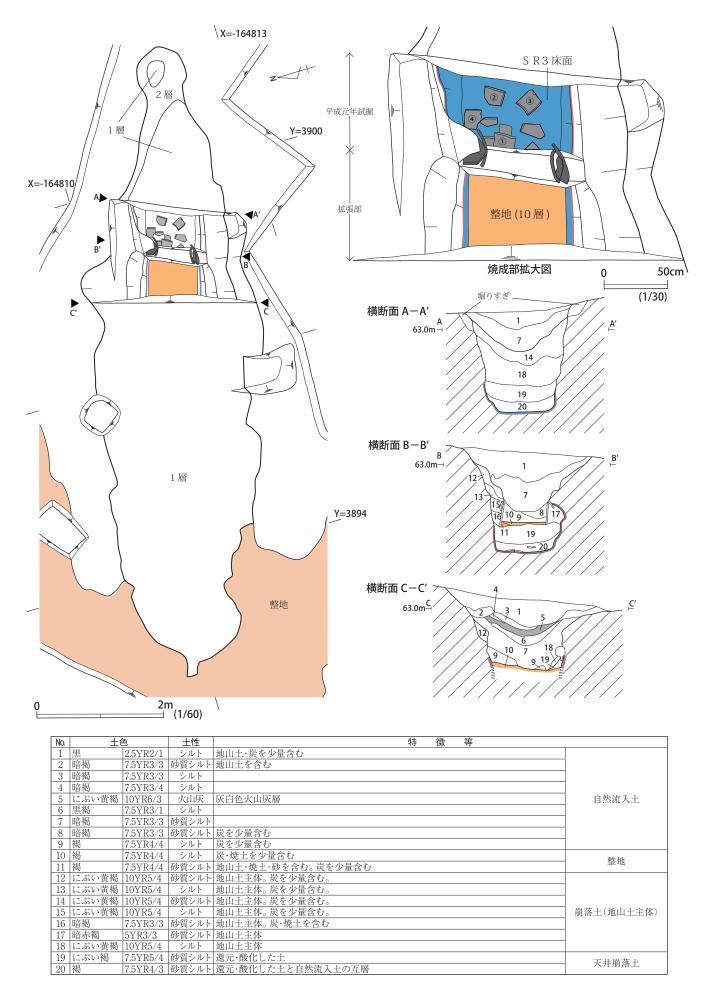
[灰原]前庭部の西側に広がっていると推測されるが、調査区外のため様相は不明である。

[廃絶後の2次使用]拡張前の試掘トレンチ西側断面、及び、拡張部分で確認した。窯跡が廃絶し、天井が崩落してできた窪地に、崩落土の除去による成形、底面の整地などの手を加えて2次的に使用したものである。その範囲は精査が部分的なため不明であるが、試掘トレンチの東側断面では崩落土が除去されていないことから、それより西側が使用されたとみられる。

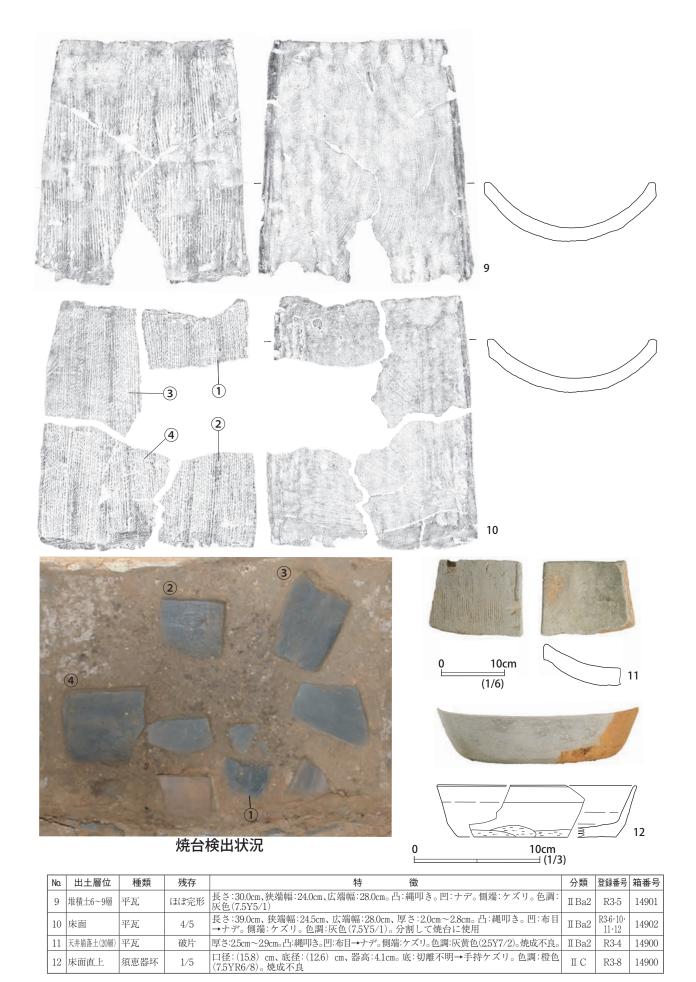
利用にあたっては窯跡の崩落土を酸化・還元した天井崩落土の上面(19層上面)まで除去し、その面に均質な褐色土(10·11層)による整地をして平坦にしている。確認面から平坦面までの深さは約1.2mである。両側の壁は下部が窯跡の側壁、上部が崩落土や地山で、平瓦で壁を押さえている場所もある。押さえには平瓦 II B類 a 2タイプが使われている。

[堆積土] 20層に細分した。1~9層は2次使用後の自然流入土で、1~4層が堆積層 I にあたる黒・黒褐色土、5層が灰白色火山灰層、6層が黒褐色土、7~9層が炭粒を少し含む暗褐色主体の砂質土である。10・11層は2次使用に伴う整地層で、炭・焼土粒を少し含む均質な褐色土である。12~18層は天井崩落に伴う上部の地山土の崩壊土で、ブロック状の地山土を多く含むにぶい黄褐色主体の砂質土である。19・20層は天井崩落土で、還元・酸化したブロック状の褐色主体の土であり、20層には薄い自然流入土が互層状に含まれる

[出土遺物] 焼成部の床面から平瓦 II B類 a 2タイプが16点出土しており、そのうち11点は焼台として使われていたものである (第10図10)。また、床面直上から平瓦 II B類 a 2タイプが7点、須恵器坏が1点 (12)、天井崩落土から平瓦 II B類 a 2タイプが8点出土しているほか (11)、堆積土1~9層から平瓦 I A 類が2点、II B類 a 2タイプが67点 (9)、須恵器甕が1点出土している。



第9図 SR3窯跡



第10図 SR3窯跡出土遺物

(2) 竪穴住居跡

3軒確認した。南側のトレンチ16・17に分布しており、それぞれ部分的に精査を実施している。

【S I 3竪穴住居跡】(第5·11図)

トレンチ16の東側で検出したほぼ方形の竪穴住居跡である。東辺の斜面上方には外周溝を伴う。本 竪穴住居跡は壁が大きく崩れて埋没しており、東半を中心に遺構の形状と規模が捉えられる深さまで 堆積土を掘り下げた。

[規模・方向] 規模は東西約3.0m、南北約3.5mである。方向は東辺で座標の北に対して東に26°振れており、斜面の等高線にほぼ平行している

[床面]未検出のため詳細は不明であるが、試掘箇所では遺構確認面から床面までの深さは約50cmで、標高は60.1mである。

[壁]地山を壁としており、床面からほぼ直立していると推定される。

[内部の施設] 煙道の位置からみて、本体は検出していないが東辺中央の南よりにカマドが設けられている。煙道は東に延びており、長さは約110cm、幅は約25cmである。煙出しの平面形は直径約30cmの円形である。

[堆積土]掘下げた面までで5層に細分した。1·2層は昨年報告した堆積層 I と同質の黒色土や黒褐色砂質土(宮多研関連2009)、3層は灰白色火山灰層、4層は黒色土、5層は地山土主体の暗褐色砂質土で、いずれも自然流入土である。

[外周溝] 東側の斜面上方を緩く曲がりながら南北方向に延びている。確認した長さは約2.3mで、南北ともに調査区外にさらに延びている。上幅は約80cmである。下幅は確認した所で約40cm、深さは15cmで、断面形は皿状である。堆積土は地山土の暗褐色砂質土で、自然流入土である。

[出土遺物] 堆積土から平瓦ⅡB類 a 2タイプ(第11図13)と丸瓦Ⅱ類が各1点出土している。

【**S I 4竪穴住居跡**】(第5·12~15図)

トレンチ16の中央で検出した竪穴住居跡で、西壁は不明瞭で把握できなかった。確認した平面形は 南北に長い長方形で、東辺の斜面上方には外周溝を伴う。北半を中心に精査を実施している。

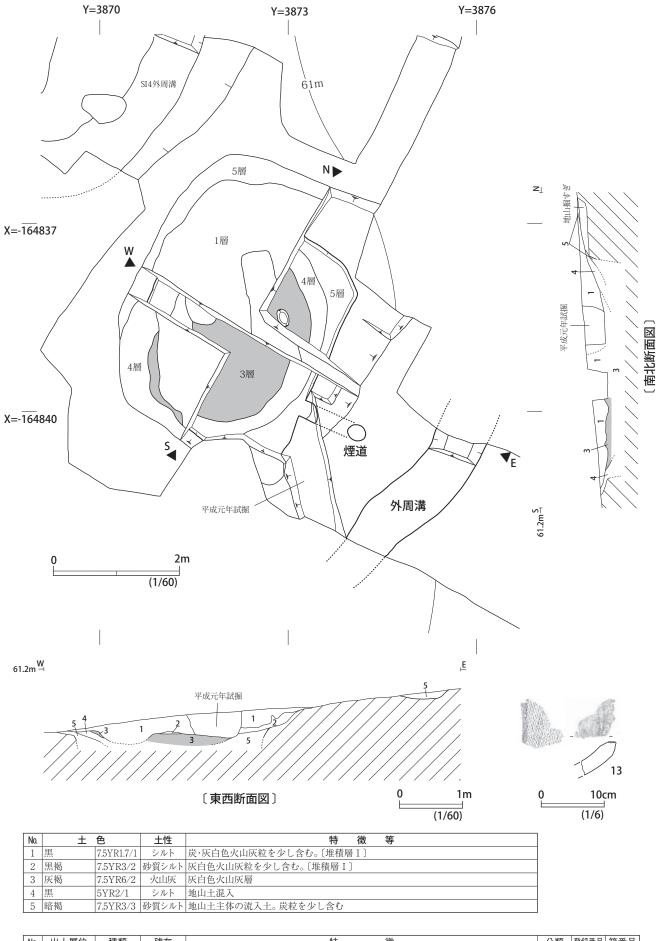
[規模・方向]規模は長辺(南北)が約7.0m、短辺(東西)が3.5m以上である。方向は東辺で座標の北に対して東に20°振れており、斜面の等高線にほぼ平行している。

[床面]検出した床面の中央部はにぶい黄褐色の掘方埋土、周辺部は地山を床面としている。ほぼ平坦で、標高は59.4mである。

[**壁**] 地山を壁としており、床面からやや斜めに立ち上がっている。東辺の最も高い所で約45cm残存している。

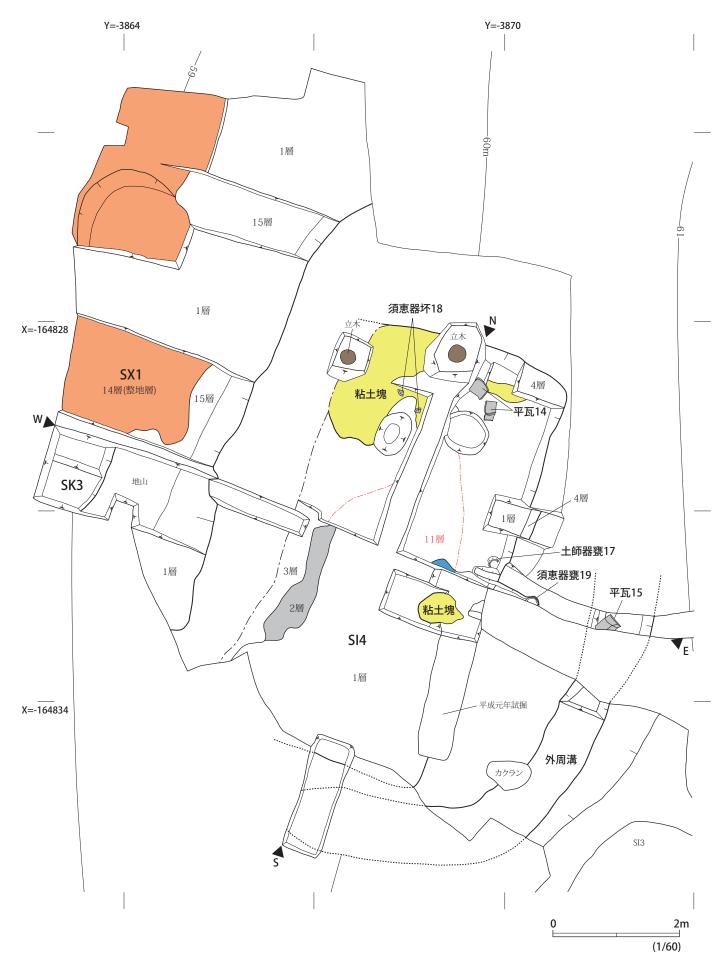
[内部の施設など]東辺の中央にカマドが設けられており、砂粒を含む黄褐色の粘土で造られている。 残存する高さは最大で約20cmで、左脇の床面には土師器甕の上半部が口縁部を上に向けて置かれてい る。煙道はカマドから東に延びており、長さは約70cm、幅はカマドとの接点で約25cmである。先端の煙 出しの平面形は直径約25cmの円形とみられ、底面には須恵器甕が据えられている。

他には施設はみつかっていないが、カマドの右手前と床面北西部で淡黄色の粘土塊を検出している。



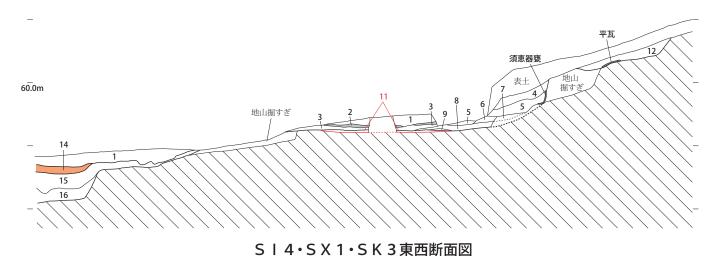
No	出土層位	種類	残存	特 徴	分類	登録番号	箱番号
13	堆積十	平瓦	破片	厚さ:2cm。凸:縄叩き。凹:布目。側端:ケズリ。色調:黒褐色(7.5YR3/1)、自然釉付着	II Ba2	I3-1	14903

第11図 SI3竪穴住居跡と出土遺物



第12回 SI4竪穴住居·SX1平場·SK3粘土採掘坑跡





No.	土	:色	土性	特徴等		No.	土	色	土性	特徴等	
1	黒	7.5YR1.7/1	シルト	砂粒と灰白色火山灰粒を少し含む。〔堆積層 I 〕		9	黒褐	10YR3/1	粘土質シルト	炭主体。焼土粒を含む	
2	灰黄褐	10YR4/2	火山灰	灰白色火山灰層。3層の土少し混入		10	淡黄	2.5Y8/14	粘土	均質	
3	灰褐	7.5YR4/2	粘土質シルト	炭粒と地山土粒を少し含む。比較的均質		11	にぶい黄褐	10YR5/3	シルト	径1cm前後の礫を含む。しまりあり。[掘方埋土]	SI4
4	褐	7.5YR4/3	砂質シルト	地山土主体の流入土	SI4		にぶい黄褐	10YR4/3	砂質シルト	地山土主体。炭粒を少し含む。〔外周溝堆積土〕]
5	褐	7.5YR4/3	砂質シルト	地山土主体の流入土。炭粒を少し含む	514	13	にぶい黄褐	10YR4/3	シルト	地山土混入。〔外周溝堆積土〕	
6	にぶい黄橙	10YR6/4	粘土	砂粒を少し含む。〔カマド崩落土〕		14	にぶい黄褐	10YR5/4	粘土	固くしまる。焼土・炭・砂粒を少し含む整地層	SX1
7	褐	7.5YR4/4	シルト	焼土・地山土ブロックの混合土。〔煙道崩落土〕		15	暗褐	10YR3/3	シルト質砂	地山土主体の流入土	SK3
8	黒褐	7.5YR3/2	砂質シルト	焼土・炭粒を多く含む自然流入土		16	にぶい黄褐	10YR5/3	粘土	地山土・粘土と炭の混合土。人為的埋土	SNS

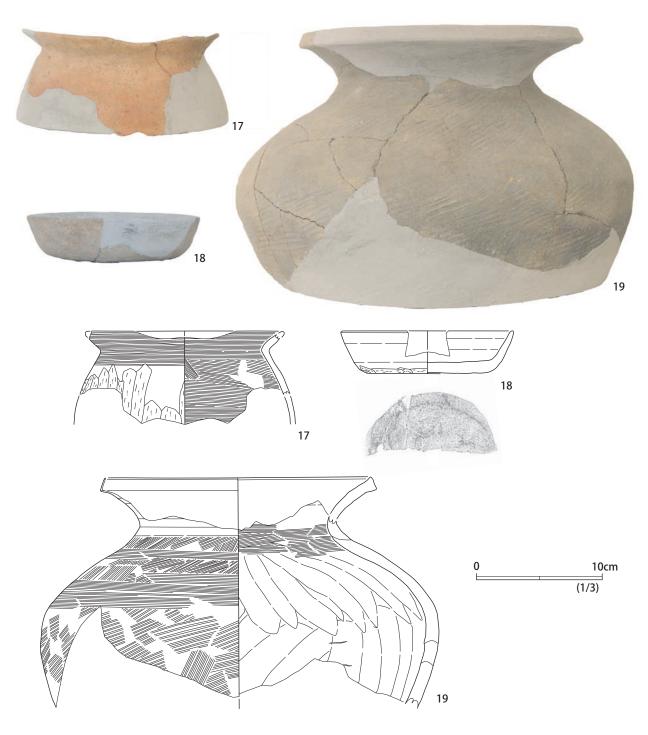
第13図 SI4竪穴住居·SX1平場·SK3粘土採掘坑跡断面図(一部反転)

ともに床面に直接のっており、大きさはカマド手前の塊が長軸約75cm、短軸約45cmで、高さは最大で約15cmある。床面北西部の塊は長軸約190cm、短軸約130cmで、高さは最大で約25cmである。

[堆積土] 9層に細分した。1~5層は自然流入土で、1層が堆積層 I にあたる黒色土、2層が灰白色火山灰層、3層が粘性のある均質な灰褐色土、4・5層が地山土を主体とする褐色土である。6~9層はカマド周辺の堆積土で、6・7層がにぶい黄橙色粘土や褐色土などのカマド・煙道の崩落土、8層が黒褐色砂質土で廃絶後のカマド内への自然流入土、9層が焼土粒を含む炭主体の層で、カマドからの掻出し土である。[外周溝]竪穴住居跡の東半分を半弧状に囲むように緩やかに曲がりながら延びているとみられる。確認した長さは東側で約4.0m、南側で約3.0mである。上幅は80cm前後、下幅は確認した所で約40cm、深さは10~20cmで、断面形は皿状である。堆積土は地山土を多く含むにぶい黄褐色の砂質土で、自然流入土である。

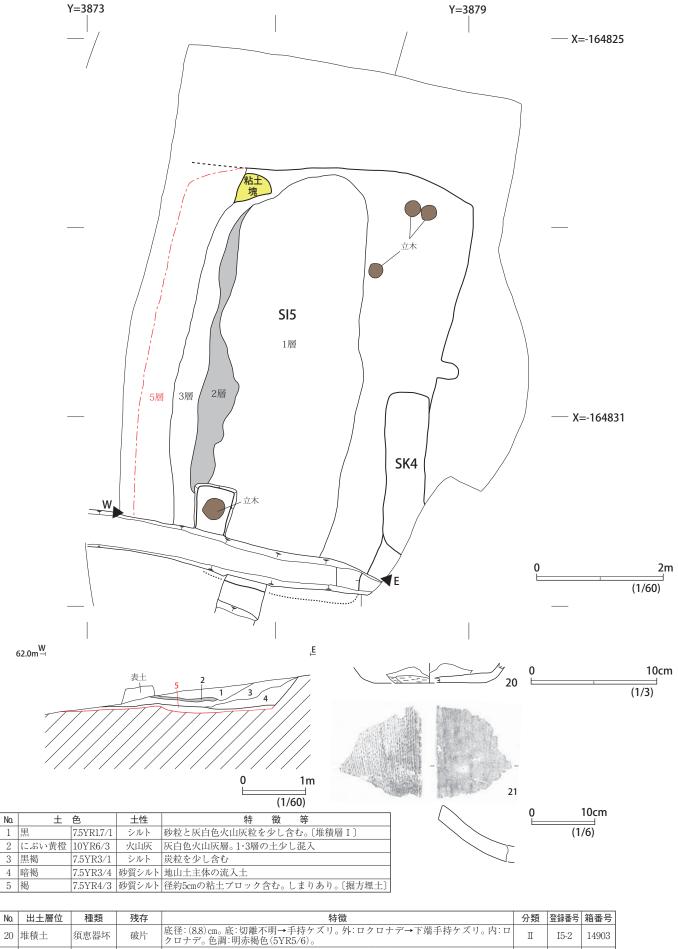


第14図 SI4竪穴住居跡出土遺物1



No.	出土層位	種類	残存	特 徵	分類	登録番号	箱番号
14	床面直上	平瓦	ほぽ完形	長さ:31.1cm。広端幅:29.2cm。狭端幅:25.2cm。厚さ:2cm、焼歪み。凸:縄叩き→矢羽根叩き、暗灰色(N3/0)、二重弧文軒平瓦瓦当の痕跡あり。凹:模骨痕·布目、灰色(5Y6/1)、凸型台による陰刻文字「下」(3回重複)。側端・小口:ケズリ	I Ca	I4-4	14905
15	外周溝堆積土	平瓦	ほぽ完形	長さ:34.0cm。広端幅:29.2cm。狭端幅:26.6cm。厚さ:2.4cm。凸:正格子叩き、灰黄色(2.5Y6/2)。凹:模骨痕·布目→糸切り、にぶい黄橙色(10YR6/3)。側端・小口:ケズリ	I Ca	I4-5	14905
16	堆積土1層	軒丸瓦	瓦当部分	重弁連花文軒丸瓦。【瓦当】瓦当面:直径19.2~21.6cm (焼歪み)、周縁内径17.0~18.8cm (焼歪み)、中房径:3.5~3.8cm (楕円形)、厚さ2.9~3.6cm、にぶい黄橙色(10YR6/3)。側端:ケズリ、黄灰色(2.5Y5/1)。瓦当裏面:ナデ、黄灰色(2.5Y5/1)	型番 125	I4-6	14903
17	床面	土師器甕	破片	口径: (15.8) cm。外: ヨコナデ→ケズリ。内: ナデ→ヨコナデ。色調: にぶい褐色 (7.5YR5/4)		I4-1	14903
18	床面粘土直上	須恵器坏	1/2	口径: (13.8) cm。底径: (9.8) cm。器高: 3.4cm。底: 切離不明→手持ケズリ。外: ロクロナデ→下端手持ケズリ。内: ロクロナデ。色調: 黄灰色 (2.5Y5/1)	ΙС	I4-2	14904
19	煙道先端底面	須恵器甕	上半1/2	口径: (21.2)cm。胴部最大径: (31.5) cm。外: 平行タタキ→回転ハケメ·ロクロナデ。内: ロクロナデ→ナデ。色調: 黄灰色(2.5Y5/1)		I4-3	14903

第15図 SI4竪穴住居跡出土遺物2



No.	出土層位	種類	残存	特徴	分類	登録番号	箱番号
20	堆積土	須恵器坏	破片	底径: (8.8) cm。底: 切離不明→手持ケズリ。外: ロクロナデ→下端手持ケズリ。内: ロクロナデ。色調: 明赤褐色(5YR5/6)。	II	I5-2	14903
21	堆積土	平瓦	破片	厚さ:2.4cm。凸:縄叩き。凹:布目→ナデ。側端:ケズリ。色調:暗灰色(N3/0)	II Ba2	I5-1	14903

第16図 SI5竪穴住居跡と出土遺物、SK4土壙

[出土遺物]床面のカマド左脇で土師器甕(第14·15図17)、煙道先端の底面で須恵器甕(19)、床面直上で平瓦IC類 a タイプ(14)、床面の粘土塊直上で須恵器坏(18)が各1点出土している。また、堆積土から重弁蓮花文軒丸瓦125(3)、平瓦IC類 a タイプが各1点、土師器甕が18点、須恵器甕4点、外周溝堆積土から平瓦IC類 a タイプ(15)が1点出土している。

平瓦はいずれも I C類 a タイプのものであり、14は凸面の調整が矢羽根叩きで、凹面には凸型台による陰刻文字「下」がみられる。焼歪みが目立ち、凸面には二重弧文軒平瓦の瓦当面とみられる痕跡もある。15は凸面の調整が格子叩きのものである。

土器のうち土師器甕は成形にロクロを使用しないものである。須恵器は坏と甕があり、粘土塊直上 出土の坏(18)は平底で、体部と口縁部が直線的に外傾する器形のものである。底部と体部下端は手持 ヘラケズリ調整されており、切離し技法は不明である。

【**S I 5住居跡**】(第5·16図)

斜面上方のトレンチ17で検出した。平面形は上述したSI4竪穴住居跡と同様である。SK4土壙より古い。本竪穴住居跡では南辺に近い所を東西方向に一部精査している。

[規模・方向]規模は長辺が約6.9m、短辺が約4.6m以上とみられる。方向は東辺で座標の北に対して東に15°振れており、斜面の等高線にほぼ平行している。

[床面]粘土ブロックを含む褐色砂質土による掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、標高は61.1mである。

[壁]確認した東壁は地山で、床面から斜めに立ち上がっている。高さは45cmある。

[内部の施設など]東辺中央に突出部があり、そこにカマドが設けられていると推定される。他の施設については掘下げが部分的なため不明であるが、確認面の床面北西部で淡黄色の粘土塊を検出している。塊は床面に直接のっており、確認した大きさは長軸が約60cm、短軸が約40cmである。

〔**堆積土**〕4層に細分した。1層が堆積層 I にあたる黒色土、2層が灰白色火山灰層、3層が黒褐色土、4層が地山土を主体とする褐色土で、いずれも自然流入土である。

[出土遺物] 堆積土から平瓦Ⅱ B類 a 2タイプが2点、須恵器坏が1点出土している(第16図20·21)。須恵器坏は底部と体部下端が手持ヘラケズリ調整された小片で、底部の切離し技法は不明である。

(3) 粘土採掘坑跡

トレンチ16南西隅の深掘りトレンチでSK3粘土採掘坑跡を確認した。

【SK3粘土採掘坑跡】(第5·12·13図)

西側の沢地に近い斜面を削って地山の明褐色砂質土を露出し、さらに掘込んで下部の淡黄色の粘土を採集した採掘坑跡である。SX1平場跡より古い。

深掘りトレンチでの確認のため、検出した範囲は東西・南北とも1.0m前後であるが、西側を中心に南・北側にも広がるものと思われる。深さはトレンチ西端で約50cmである。

堆積土は上下2層に分けられる。下層は地山の明褐色砂質土、淡黄色粘土、炭が混合したしまりのない粘土で、人為的に埋め戻されている。上層は地山主体の暗褐色砂質土で、自然流入土である。遺物は

出土していない。

(4) 平場跡

トレンチ16の西側でSX1平場跡を確認した。

【SX1平場跡】(第5·12·13図)

S K3粘土採掘坑跡の埋没後に造られた平場跡で、東側はS K3粘土採掘坑跡を覆う暗褐色砂質土層を上面とし、西側はにぶい黄褐色の粘土を整地して平坦面を造成している。

確認した範囲は東西約4.7m、南北約7.0mだが、西側を中心に南・北側にも広がるとみられ、面積は33㎡以上と考えられる。上面はほぼ平坦でしまりがあり、特に整地層上面は固い。整地層の厚さは確認した最大で約12cmで、上面の標高は58.7mである。また、平場跡の上面には炭粒や焼土粒が認められ、最終的には堆積層 I にあたる黒色土に覆われている。

[出土遺物]整地層上面で平瓦 I A類が1点出土しているほか、瓦が5点出土している。いずれも焼成が不良な小片で、にぶい赤褐色を呈している。

(5) 土塘

トレンチ17でSK4土壙、トレンチ19でSK5土壙を検出した。ともに全体を検出していないため溝の可能性もあるが、確認した南端で遺構がすぼまる様子がみられることから土壙とした。

【SK4土壙】(第5·16図)

南辺にやや丸みがあるが、概ね南北に長い長方形とみられる土壙である。SI5竪穴住居跡より新しい。規模は長さが約260cm、幅が約70cmである。方向は長軸で座標の北に対して東に3°振れており、斜面の等高線にほぼ平行している。堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色土(7.5YR3/3)で人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SK5土壙】(第5·8図)

SK4土壙と同様に南北に長い長方形とみられる土壙である。南端は検出していないが、東・西辺が調査区の南壁付近で狭くなることから、その付近と思われる。SR2窯跡より新しい。本土壙については北半を精査した。

規模は長さが約250cm以上、幅が約65cmで、深さは30cmである。底面は平坦で、横断面形は箱形をしている。方向は長軸で座標の北に対して東に20°振れており、斜面の等高線にほぼ平行する。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色土(7.5YR3/2)で人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。

(6) 堆積層

【堆積層Ⅳ】(第5図)

北側のトレンチ17北半で検出した黒褐色土層である。SR3窯跡掘削時の整地層の北側を覆って東西6.0m以上、南北7.8m以上の範囲に分布しており、沢状に少し窪んだ地形に沿って堆積している。厚さは西側が厚く、確認した最大では調査区西壁で約15cmである。また、調査区西壁では上面に堆積層

Iにあたる黒色土が薄く堆積しているのが認められた。

[出土遺物] S R3窯跡掘削時の整地層上面にあたる場所を中心に多量の瓦のほか、須恵器坏が1点出土している。確認した瓦はすべて平瓦で、ほとんどがⅡB類 a 2タイプのものである(第17図23)。また、赤褐色を呈した焼成不良品が多い(図版5左下)。須恵器坏は口縁部が直線的に外傾する器形のものである(22)。



No.	出土層位	種類	残存	特 徴	分類	登録番号	箱番号
22	堆積層Ⅳ	須恵器坏	破片	内·外:ロクロナデ。色調:褐灰色(10YR5/1)	ΙC	堆4-4	14906
23	堆積層IV	平瓦	完形	長さ:39.2cm。広端幅:28.1cm。狭端幅:26.0cm。厚さ:2.1cm。凸:縄叩き。凹:布目→ナデ。 側端・小口:ケズリ。色調:褐灰色(10YR4/1)	II Ba2	堆4-1	14906

第17図 堆積層Ⅳ出土遺物

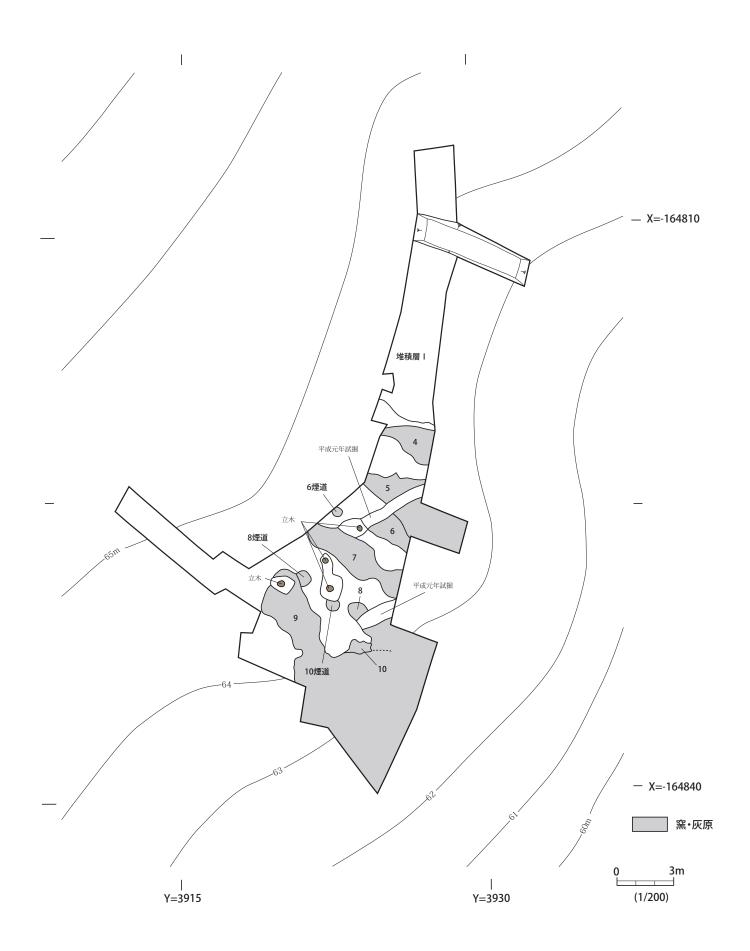
B. 東斜面地区

厚さ10~20cmの表土下の地山で7基の窯跡を確認した(第4·18図)。それらは斜面が東側に張り出した南半に分布しており、北半には昨年度の調査と同質の堆積層 I が広がっている。

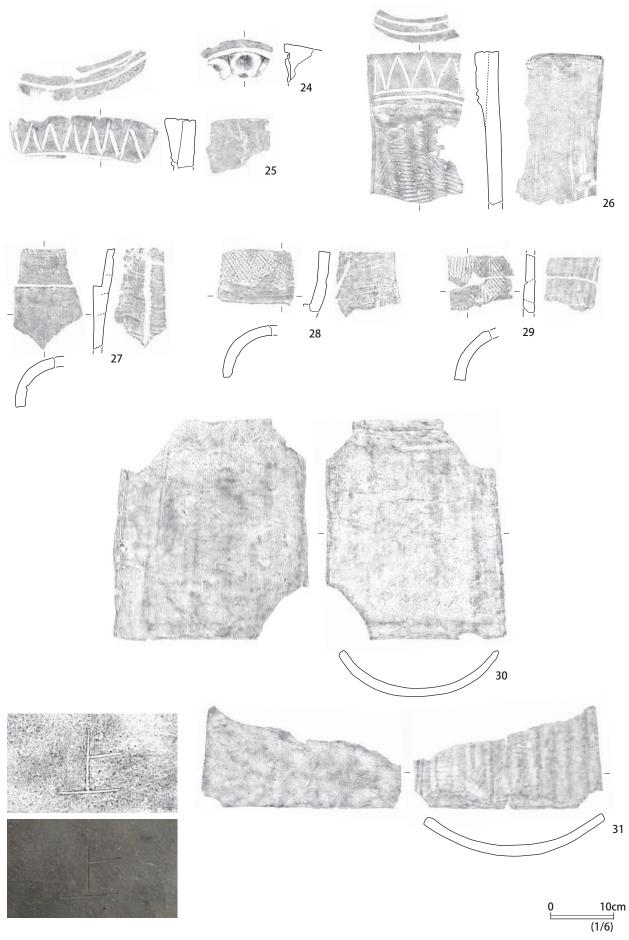
窯跡は南北約20mの間に密集しており、重複も認められる。各窯跡の規模・特徴の詳細については、今回の調査が窯跡の状況確認を目的としたため十分には明らかではないが、窯跡6·8·10は窯体と煙道が地山を挟んで確認しており、地下式窖窯とみられる。また、以上の窯跡、及び灰原の最上面には堆積層Iと同質の黒色土が堆積しており、窯跡5では黒色土の下に灰白色火山灰層の堆積もみられた。 【出土遺物】各窯跡の堆積土や灰原には多量の瓦が含まれており、須恵器も若干認められる。

確認面で取上げた瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、軒丸瓦には瓦当の文様が重弁蓮華文のものがあるが(第19図24)、小破片のため型番は不明である。軒平瓦には二重弧文軒平瓦511があり(25・26)、26は c タイプのものである(註 2)。丸瓦には Π B類があり、ロクロ調整前の叩き目には縄叩きのa タイプ、格子叩きのb タイプ、矢羽根叩きの c タイプの各種がみられる(27~29)。平瓦は桶巻き作りの Π 類が大部分をしめており、 Π A類、 Π A類 a タイプ、 Π B類、 Π C類 a タイプ、 Π D類がある(30~40・42)。このうち Π A類には凸面に Π 上上の刻書を焼成前にしたものがある(31)。また、 Π C類 a タイプの凸面の叩き目には平行叩き、格子叩き、矢羽根叩きなどがあり、各叩き目の原体にも多様性がみられる(35~40)。なお、以上のほかに1枚作りで凸面がナデ調整された Π A類が少量出土している(41)。

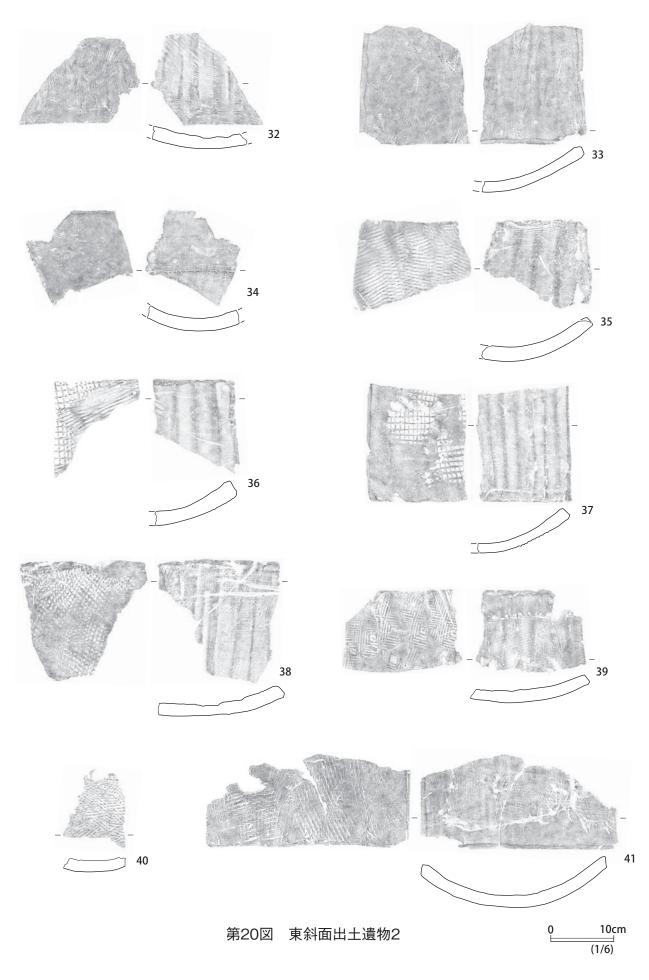
須恵器には坏、鉢(45)、甕がある。坏には底部から体部が直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至るもの(44)とやや外反する器形のもの(43)がある。そのうち後者は平底の坏で、底部には手持ヘラケズリ調整が施されている。底部の切離し技法は再調整のため不明である。

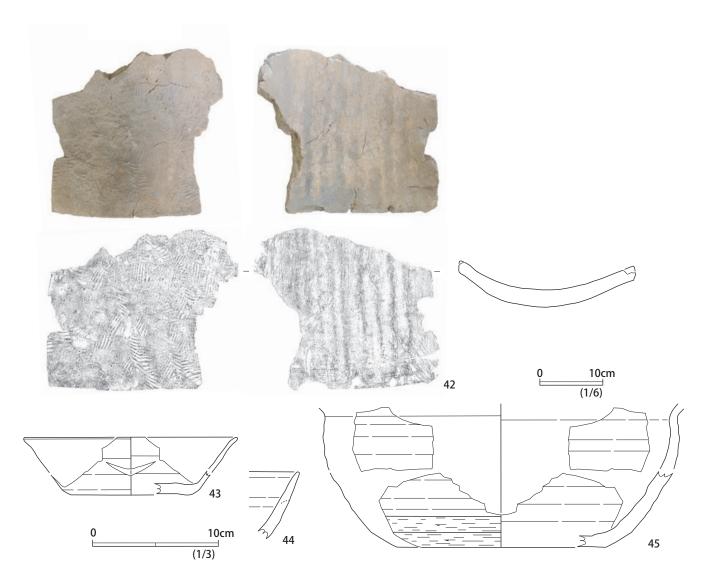


第18図 東斜面地区



第19図 東斜面出土遺物1





No.	出土 層位	種類	残存	特 徵	分類	登録 番号	箱番号
24	確認面	軒丸瓦	瓦当破片	重弁蓮花文軒丸瓦。【瓦当】瓦当面:直径(19.4)cm、周縁内径(16.8)cm、厚さ2.9~3.6cm。側面:ケズリ。色調:にぶい褐色(7.5YR5/3)	型番不明	E1	14907
25	確認面	軒平瓦	瓦当破片	二重弧文軒平瓦。【瓦当】瓦当面:幅40~5.0cm、手描き沈線2条。顎面:ナデ→鋸歯文・鋸歯文下に直線文。色調:オリーブ黒色(5Y3/1)	型番511	ЕЗ	14907
26	確認面	軒平瓦	1/4	二重弧文軒平瓦。【瓦当】瓦当面:幅29~3.9cm、手描き沈線2条。 顎面:平行叩き→ナデ→鋸歯文・鋸歯文下に直線文2本。【平瓦】厚さ:2.4cm。凸:縄叩き→平行叩き。凹:布目。側端:ケズリ。色調:黄灰色(2.5Y5/1)	型番511c	E5	14907
27	確認面	丸 瓦	破片	狭端幅:12.0cm、厚さ:1.6cm。凸:縄叩き→ロクロナデ。凹:布目。側端・小口:ケズリ。色調:褐灰色(7.5YR4/1)	II Ba	E7	14907
28	確認面	丸 瓦	破片	狭端幅:16.2cm、厚さ:1.8cm。凸:斜格子叩き→ロクロナデ。凹:布目。側端・小口:ケズリ。色調:暗灰黄色(2.5Y5/2)	IIΒb	E8	14907
29	確認面	丸 瓦	破片	厚さ:1.7cm。凸:矢羽根叩き→ロクロナデ。凹:布目。側端:ケズリ。色調:にぶい褐色(7.5YR5/4)	II Bc	E9	14907
30	確認面	平 瓦	ほぽ完形	長さ:35.3cm、広端幅:27.4cm、厚さ:1.6cm。凸:ナデ。凹:布目→ナデ。側端・小口:ケズリ。色調:褐灰色(10YR4/1)	ΙA	E10	14908
31	確認面	平 瓦	1/4	広端幅:27.4cm、厚さ:1.7cm。凸:ナデ、暗灰色(N3/1)。凹:布目→ナデ、褐灰色(10YR4/1)。側端・小口:ケズリ。 凸面に焼成前に刻書「上」	ΙA	E11	14908
32	確認面	平 瓦	破片	厚さ:2.1cm。凸:縄叩き→ナデ。凹:模骨痕·布目→ナデ。小口:ケズリ。色調:褐灰色(10YR5/1)	I Aa	E12	14908
33	表 採	平 瓦	1/4	厚さ:1.6cm。凸:縄叩き→ナデ。凹:ナデ。側端・小口:ケズリ。色調:褐灰色(10YR4/1)	I Aa	E13	14908
34	確認面	平 瓦	破片	厚さ:2.0cm。凸:ナデ、黄灰色(2.5Y4/1)。凹:布目、にぶい褐色(7.5YR5/3)。小口:ケズリ	IΒ	E14	14908
35	確認面	平 瓦	破片	厚さ:2.3cm。凸:平行叩き。凹:模骨痕・布目。側端・小口:ケズリ。色調:にぶい黄橙色(10YR7/3)	I Ca	E15	14909
36	確認面	平 瓦	破片	厚さ:2.6cm。凸:正格子叩き→平行叩き。凹:模骨痕・布目。側端・小口:ケズリ。色調:にぶい褐色(7.5YR5/3)	I Ca	E16	14909
37	確認面	平 瓦	1/4	厚さ:1.6~2.3cm。凸:正格子叩き。凹:模骨痕·布目。側端·小口:ケズリ。色調:褐灰色(10YR5/1)	I Ca	E17	14909
38	確認面	平 瓦	1/4	厚さ:2.1cm。凸:斜格子叩き。凹:模骨痕·布目。側端·小口:ケズリ。色調:にぶい黄橙色(10YR6/3)	I Ca	E18	14909
39	確認面	平 瓦	破片	厚さ:2.0cm。凸:縄叩き→矢羽根叩き。凹:模骨痕·布目。側端·小口:ケズリ。色調:黄灰色(2.5Y5/1)	I Ca	E20	14909
40	確認面	平 瓦	破片	凸:矢羽根叩き。色調:灰黄褐色(10YR6/2)	I Ca	E21	14909
41	確認面	平 瓦	1/4	広端幅: (30.2)cm、厚さ:2.0cm。凸:縄叩き→ナデ。凹:布目→ナデ。側端・小口:ケズリ。色調:褐灰色(7.5YR4/1)	ΠA	E22	14909
42	確認面	平 瓦	1/2	広端幅: (28.6) cm、厚さ:2.7 cm。凸:矢羽根叩き。凹:布目→ナデ。側端・小口:ケズリ。色調:褐灰色 (10YR4/1)	ΙD	E19	14909
43	確認面	須恵器坏	破片	口径:(17.0)cm、底径:(9.6) cm、器高4.6cm。底:切離不明→手持ケズリ。内·外:ロクロナデ。暗赤灰色(10YR4/1)	ΠA	E24	14909
44	確認面	須恵器坏	破片	内·外:ロクロナデ。 灰褐色 (5YR4/2)	ΙΙC	E23	14909
45	確認面	須恵器鉢	破片	底径:(16.6分m。底:切離不明→回転ケズリ。外:ロクロナデ→下部回転ケズリ。内:ロクロナデ。褐灰色(10YR4/1)		E25	14909

第21図 東斜面地区出土遺物3

5. 考察

A. 西斜面地区

窯跡3基、竪穴住居跡3軒、粘土採掘坑跡1ヵ所、平場跡1ヵ所、土壙2基のほか、堆積層Ⅳを検出した。 遺物は瓦、土器、硯が出土している。以下では、それらの遺構と遺物について整理・検討し、昨年度の 成果と合わせてF地点西斜面地区の様相について述べる。

(1) 遺物について

出土遺物の大部分は瓦であり、土器は少なく、硯も小片が1点あるのみである。

[瓦]

軒丸瓦、丸瓦、平瓦があり、ほとんどは平瓦である(表2)。これらの瓦は多賀城跡出土瓦の分類(宮多研1980・1982)で捉えられるもので、軒丸瓦は重弁蓮花文125、丸瓦はⅡ類のものである。平瓦はIA・IB類、IC類aタイプ、ⅡB類の各種があるが、一枚作りで凸面の長軸方向に長い縄叩き目があることが特徴のⅡB類a2タイプが圧倒的に多い(註3)。

軒丸瓦と平瓦は多賀城跡第 I 期の瓦群に属すものである。特に主体をしめる平瓦 II B類 a 2タイプは、その瓦から製作された均整唐草文軒平瓦660、それと組む細弁蓮花文軒丸瓦230・231が平城宮跡軒平瓦6721、平城宮跡軒丸瓦6282を祖型とすることから第 I 期でも新しい平瓦とみられ、製作年代を天平10年(738)前後頃とする見方も示されている(佐川2000)。一方、重弁蓮花文125と I 類の平瓦は上記の瓦より古い特徴をもつ瓦であり、年代的には多賀城創建の養老・神亀年間頃(717~729)が上限となる(註4)。

以上の軒丸瓦、平瓦に対して丸瓦 II 類は、多賀城跡第 $I \sim IV$ 期の瓦群すべてにみられるが、軒丸・平 瓦の様相からすれば、同じ第 I 期のものとみるのが妥当と思われる。

【土器】

土師器と須恵器があり、土師器はごく少量である。器種がわかるものには甕があり、製作にロクロを使用しないものである。

須恵器は坏・鉢・甕・壺があるが、大部分は小片で、特徴を捉えられるものは僅かである。須恵器坏を昨年度の報告、及び、その基準とした西側の沢向かいに隣接するC地点の分類(次頁)でみると(註5)、丸底風平底のI類(1)と平底のI類(5·12·18)があり、I 類は概ねI B類、I 類の12·18は体・口縁部が直線的に外傾するI C類にあたるものである。口縁部の形状からI C類とみられる坏は他にもあり(22)、全体的に須恵器坏はI C類を主体とし、他にI B類を含む様相を示す。

ところで、C地点の土器群において須恵器坏 I B類は第Ⅲ群土器、Ⅱ C類は第Ⅱ・Ⅲ群土器に含まれており、今回出土した須恵器坏は第Ⅱ・Ⅲ群土器に対応することになる。しかし、第Ⅲ群土器で主体をなす Ⅱ A・Ⅱ B類はみられない。また、第Ⅲ群土器の須恵器坏の主体が Ⅱ C類であることからすると、第Ⅲ群土器の頃に近い様相にあることが考えられる。西斜面地区の出土土器は昨年度も同じ様相がみられた(宮多研関連2009)。他に矛盾する特徴を持つ土器もない。

地点			į	重弁蓮	花文	軒丸瓦	ī			細弁文軒	蓮花 丸瓦			丸		瓦			=	二重弧文軒平瓦			無文	均整唐草 文軒平瓦	平			瓦			鬼板	文	字	1	হ
	114	122	123	124	125	126	127	128	不明	230	231	IΑ	II	IΙΒ	IIΒa	IIΒb	IIΒc	不明	511	511 a	511 с	511 d	641	660	ΙA	IΒ	I Ca	ΙD	ΠA	IΙΒ	950B				
Α						0								0								0			0		0		0	0					
В					0				0					0						0					0		0		0				儿上	下」	
С	0			0		0		0	0	0	0				0	0		0	0		0		0	0	0	0	0	0	0	0		[新田伊	F[]	
D		0	0	0	0	0	0								0	0	0		0						0						0	「大」「木」「 「富田」「-1][上] :][今]	[小 [小	」「下」「毛」 日建万呂」
Е																			0																
F東									•						•	•	•		•		•				•	•	•	•	•				仁上	J	
F西					•								•	0			0							0	•	•	•			•			厂下	J	
不明																																「相」「	小田」	(D地	点?)

表2 日の出山窯跡群の瓦

●…今年度出土

◎ C地点の瓦と多賀城跡出土瓦との対応関係(左がC地点の分類と群設定、右が多賀城跡の分類)

〈A群〉軒丸瓦: I 類 … 重弁蓮花文(型番不明)

軒平瓦: I 類 … 二重弧文511 丸 瓦: I 類 … II B a · b 類

平 瓦:IA~D類 … IA·IB·ICa·ID類

〈B群〉軒丸瓦:ⅡA·B類 … 細弁蓮花文230·231

軒平瓦:Ⅱ・Ⅲ類 ・・・ 均整唐草文660、無文641?

丸 瓦:Ⅱ類 … 該当なし

平 瓦: Ⅱ類 … Ⅱ B類 a 2タイプ

◎須恵器坏の分類

Ⅰ類:丸底の坏

A類:体部から口縁部が内湾気味に外傾、もしくは直立する。

B類:底部と口縁部の境に段が形成される。

Ⅱ類:平底の坏

A類:体部・口縁部が外反する。丸底風の平底が多い。

B類:体部·口縁部が内湾気味に立つ。揚げ底風の平底が多い。

C類:体部·口縁部が直線的に外傾する。口縁部内に沈線の巡るものがある。

◎第Ⅰ~Ⅲ土器群における須恵器坏の様相と瓦との共伴関係

【第 I 群土器】8世紀初頭。多賀城の創建以前

構成: IA·ⅡA·ⅡB類

器 形: 丸底、丸底風平底、平底のものがあり、体部・口縁部は外反・内湾気味に立つ。

法 量:器高が低く、口径に比して底径の大きなものが主体。

切離し:ヘラ切りと静止糸切りがほぼ同数。

再調整:底部全面が再調整され、切離しが不明なものがかなり多い。

【第Ⅱ群土器】養老・神亀年間(717~728)前後、もしくはそれ以降

構成:ⅡA·ⅡB·ⅡC類

器 形:平底で、体部・口縁部は外反・内湾気味に立つⅡA・B類が主体。

法 量:器高が低く、口径に比して底径の大きなものが主体。

切離し:ヘラ切りと静止糸切りがあり、静止糸切りがやや多い。

再調整:底部全面が再調整され、切離しが不明なものがやや多い。

瓦 :A群

【第Ⅲ群土器】天平10 (738)年前後(※)

構成: I B·ⅡA·ⅡB·ⅡC類

器 形:平底で、体部・口縁部は直線的に外傾するⅡ C類が主体。

法 量:器高が高く、口径に比して底径の小さなものが主体。

切離し:ヘラ切り・静止糸切り・回転糸切りがあり、糸切りが多い。

再調整:底部周縁が再調整され、中央に切離し痕跡を残すものが多い。

瓦 :B群

《参考: C地点の瓦と須恵器坏》

※色麻町1993から作成。なお、第Ⅲ群土器の年代は天平11年(739)とするが、ここでは本文にあわせて修正している。

地区	遺構	軒 丸 瓦		丸 瓦				軒平瓦			平瓦							須恵器坏		
		125	型番不明	П	IΙΒ	IIBa	IIBb	IIBc	511	511 c	660	ΙA	IAa	ΙB	ICa	ΙD	IΙΑ	IIBa2	I	I
西斜面 (北半)	SR1													0				0	O(B)	0
	SR2																	0		
	SR3											0						0		O(C)
	SI3			0														0		
	SI4	0													0					O(C)
	SI5																	0		
	SX1											0								
	堆積層Ⅳ																	0		O(C)
西斜面 (南半)	SI1 b							0												O(C)
	SK1																			O(C)
	堆積層 I			0	0						0	0						0		
	堆積層Ⅱ																	0		
	堆積層Ⅲ											0								
東斜面			○(重弁蓮花文)	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0			O(C)

表3 F地点の瓦と須恵器坏

また、C地点の第 $II \cdot III$ 群土器は各々 $A \cdot B$ 群の瓦(前頁)と共伴しており、A群は多賀城跡第I期でも古い瓦、B群は新しい瓦にあたるが、前述したように今回出土した瓦の大部分は平瓦IIB類 a 2タイプでB群に含まれる瓦であり、A群の瓦は少ない。そのあり方は土器と合致している。

第Ⅱ・Ⅲ群土器の年代はA・B群の瓦から位置づけられており、第Ⅱ群土器は養老・神亀年間(717~729)前後頃から天平10年(738)前後頃、第Ⅲ群土器は天平10年(738)前後頃とみられている。今回の出土土器は第Ⅲ群土器に近い様相を示すことから、概ね8世紀第2四半期頃のものとみておきたい。

【硯】

脚部に透かしがあるものが1点あるが、小片のため詳細は不明である。

(2) 遺構の年代と特徴

①遺構の年代

F地点の出土遺物をまとめたものが表3である。西斜面地区北半の遺構では平瓦ⅡB類a2タイプと 須恵器坏ⅡC類を中心に遺物が出土しているのが知られる。そのうち比較的良好な状況で遺物が出土 し、年代がほぼ捉えられる遺構は次のとおりである。

【SR1窯跡】

前庭部掻出し土と床面を覆う炭層の直上から平瓦 I B類が出土しており、養老・神亀年間(717~729)前後頃から天平10年前後頃(738)の窯跡と考えられる。

【SR3窯跡】

焼成部床面の焼台に平瓦ⅡB類 a 2タイプが使われており、床面直上では須恵器坏ⅡC類が出土している。また、廃絶後の2次使用の際にも同様の平瓦で側壁が押さえられている。2次的な使用まで含めて年代は天平10年前後頃とみられる。

【S I 4竪穴住居跡】

床面直上から平瓦 I C類 a タイプ、床面の粘土塊直上から須恵器坏Ⅱ C類が出土していることから養老・神亀年間前後頃から天平10年前後頃の竪穴住居跡と考えられる。

【堆積層Ⅳ】

SR3窯跡掘削時の整地層直上にあたる場所を中心に焼成不良の平瓦ⅡB類a2タイプを多数含んで 堆積している。SR3機能時の天平10年前後頃からの堆積とみられる。 遺物から年代が知られる遺構は以上であり、それらは養老・神亀年間(717~729)頃から天平10年(738)前後頃のものと位置づけられる。その他の遺構でも同様の遺物が出土しているが、堆積層からの出土が主体で数も少なく、各遺構の年代を限定するまでには至らない。そこで遺構の分布状況や重複関係、堆積土の特徴などの整理を踏まえて総括的に検討する。

今回の調査で検出した遺構は、土壙を除いて遺構ごとにまとまって分布している(第4·5図:5·7頁)。 北から堆積層IV、窯跡、竪穴住居跡の順に分布し、竪穴住居跡西側の沢に近い場所には平場跡や粘土 採掘坑跡がある。窯跡は北からSR3~1の順に並列している。また、窯跡南側の斜面では階段状に遺 構がみられ、上からSI3·5竪穴住居跡、SI4竪穴住居跡、SX1平場跡、SK3粘土採掘坑跡の順に位 置する。重複関係も少なく、土壙が窯・竪穴住居跡と重複する以外には粘土採掘坑跡と平場跡が重複す るのみである。北側の窯跡と南側の竪穴住居跡などの遺構は勿論重複せず、窯跡同士や竪穴住居跡同 士にも重複関係はない。

堆積土は窯跡、竪穴住居跡などでは共通性がある。窯跡の天井崩落土を除くと、下から概ね①地山土を含む暗褐・褐色砂質土層、②黒・黒褐色度土層や灰褐色土層、③灰白色火山灰層、④黒・黒褐色土層(堆積層 I)の順に自然流入土が堆積している。重複する粘土採掘坑・平場跡でも下から淡黄色粘土・炭などの混合土層(S K3下層)、地山主体の暗褐色砂質土層(S K3上層)、黄褐色粘土層(S X1平場跡整地層)、黒色土層(堆積層 I)の順であり、整地層を挟んで上述の①・④にあたる自然流入土がみられる。検出範囲が狭いことを考慮すれば、概ね同様の堆積状況であることが窺われる。一方、土壙は地山ブロックを含む黒・暗褐色土で埋め戻されており、共通性は見出せない。

分布·重複·堆積土の状況は以上のとおりである。土壙のみが異質であり、それ以外は遺構ごとに比較的整った分布状況を呈し、ほとんど重複せず、堆積土には共通性がある。状況から判断して、それらは同じ頃の1まとまりの窯場の遺構とみるのが自然であり、出土遺物をはじめとして矛盾する特徴もみられない。年代は、土壙以外の全体について先述した遺構の年代観から養老・神亀年間(717~729)前後頃から天平10年(738)前後頃と考えられる。

ただ、前節でみたように出土遺物は上記の年代幅の中でも新しいものが大半をしめている。また、 後述するように精査した窯跡の床面は基本的には1枚であり、竪穴住居跡にも建替えがないことから 窯場の存続期間は比較的短いことが考えられる。それらの点を考慮し、ここではやや幅を狭めて8世紀 第2四半期頃の遺構とみておきたい。

②各遺構の特徴

〔窯跡〕

検出した $SR1\sim3$ はすべて地下式窖窯である。規模は全長が SR1で約7.9m、 $SR2\cdot3$ で約10.0~11.4 mで(註6)、SR1は本窯跡群では標準的だが(表4)、 $SR2\cdot3$ は一周り以上大きい。方向はいずれも東西方向で、 $SR1\cdot2$ は斜面の等高線に対してほぼ直交する。一方、SR3は前庭部でみると末端が南に振れている。その特徴は最も北に位置する窯跡であることに起因するものと思われる。

焼成・燃焼部の床面は、 $SR1\cdot3$ の確認箇所ではSR1に一部補修があるものの基本的に1枚である。また、焼成部は平均 20° 前後の斜面で、SR1では奥壁に向かって傾斜が強まる傾向がみられた。

ᆂ	`鬼## <i>力</i>	1#\#	一种不	ΛE	焼 長さ 幅		成	部	燃		焼	部	<u></u> 窯体長	前 庭 部			生山口	/#±+z
地点	遺構名	構造	浑迫	王長	長さ	幅	床面	傾斜	長さ	幅	床面	傾斜等	羔肸反	形状	長さ	幅	製品	備考
	1号窯跡	地下	直立	8.8	3.8	1.0	1	10~15°	1.6	0.8	1	平坦	5.4	長楕円形	2.3	0.9	瓦·須恵器	排水溝有り
	3号窯跡	地下	直立	7.8	3.6	1.1	2	12°	2.0	1.1	2	窪む	5.6	長方形。底面に窪み	1.8	1.2	瓦·須恵器	奥壁抉込み。廃絶後に瓦貯蔵
	4号窯跡	地下	直立	9.6	3.4	1.05	2	7~25°	1.9	0.8	2	窪む	5.3	逆三角形状	3.3	0.8	瓦·須恵器	排水溝有り
Α	5号窯跡	地下	直立	8.2	3.5	0.9	5~6	7~25°	2.0	0.8	2	平坦	5.5	長方形	4.5	1.1	瓦·須恵器	
	6号窯跡	地下	直立	7.7	3.2	1.35	2	12~28°	1.8	1.1	2	窪む	5.0	長方形	2.0	1.1	瓦·須恵器	奥壁抉込み
	7号窯跡	地下	直立	7.7	3.4	1.15	3~4	10~20°	1.8	0.9	3~4	窪む	5.2	長方形。底面に窪み	2.1	1.1	瓦·須恵器	奥壁抉込み
	8号窯跡	地下	直立	4.1	1.6	0.6	1	7~12°	1.0	0.3	1	平坦	2.6	長楕円形	1.5	-	須恵器	
	第1号窯跡	地下	直立	8.4	3.2	1.1	2	17°	1.8	0.7	2	窪む	5.0	長方形	3.4	1.7	須恵器	奥壁抉込み。側壁補修。排水溝有り
	第2号窯跡	地下	直立	8.6	3.1	0.9	6	15°	1.0	0.6	6	平坦	4.1	土壙状。一段低い。底面凹凸	4.5	3.2	須恵器	側壁補修。排水溝有り
	第3号窯跡	地下	-	(3.6)	-	-	-	_	-	-	-	-	-	楕円形。底面凹凸	3.6~	2.1		外周溝有り
C	第4号窯跡	半地下	直立	8.8	5.1	1.1	1	13°	2.2	1.0	1	平坦	7.3	長方形	1.5	4.0		
	第5号窯跡	地下	直立	5.9	2.2	1.0	2	23°	1.6	0.5	9	平坦	3.8	方形。一段低い。底面凹凸	2.2	2.4	須恵器	奥壁抉込み。側壁補修。外周溝有り
	第6号窯跡	地下	直立	8.4	3.2	1.1	2	17°	1.8	0.7	2	平坦	5.0	溝状	3.4	1.7	須恵器	
	第7号窯跡	地下	直立	(1.0)	(1.0)	(0.4)	1	10°	-	_	_	-	(1.0)		-	_		
	SR1窯跡	地下	直立	7.9	2.9	1.0	1	23°	2.1	1.1	2	平坦	5.0	方形。一段低い。底面凹凸	2.9	2.8	瓦·須恵器	須恵器主体。外周溝有り
F西	SR2窯跡	地下	-	11.4	-	_	-	_	-	-	-	-	-		-	-	瓦·須恵器	平瓦主体
	SR3窯跡	地下	-	10.0	-	0.8	1	19°	_	_	_	-	_		-	-	瓦·須恵器	平瓦主体。廃絶後2次使用

※長さの単位:m。()は残存長。床面の傾斜等は1次床面で記載。

表4 窯跡一覧

地点	遺構名	平面形	規模(m)	柱穴	壁柱	周溝	カマド(芯材)	貯蔵穴	ロクロピット	粘土塊	備考(C地点の遺	i 構期)
	第1号竪穴遺構	長方形	9.8×3.0					2		0		第Ⅲ期
	第2号竪穴住居跡	方 形	4.5×4.5	4		0	○(土師器甕)		1		粘土貯蔵ピット1	第Ⅱ期
	第3号竪穴住居跡	長方形	5.0×4.0	4			0	2	1			第Ⅲ期
	第4a号竪穴住居跡	方 形	4.5×4.5	4			0	1	1			第Ⅲ期
	第4b号竪穴住居跡	方 形	6.0×6.0	4	9	0	○(丸瓦)		2			第Ⅲ期
	第5号竪穴住居跡	不 明	5.0×(4.0)	4		0					焼面有り	第Ⅰ期
	第6号竪穴住居跡	不 明	5.5×(2.0)	(2)	6	0	○(丸瓦)	2				第Ⅲ期
C地点	第7号竪穴住居跡	不 明	4.4×(3.3)	4		0	0		1	0		
	第8号竪穴住居跡	(方形)	6.0×(5.0)	4	4	0	0				1度建替え	
	第9号竪穴住居跡	長方形	$(4.0) \times 3.5$		2		0		2	0		第Ⅲ期
	第10号竪穴遺構	(長方形)	7.5×4.5			0	0			0		第Ⅰ期
	第11号竪穴住居跡	不 明	4.0×3.0									第Ⅰ期
	第12号竪穴住居跡	不 明	$(2.0) \times (1.0)$			0						
	第13号竪穴住居跡	方形?	5.0×4.0	4			○(丸瓦)	1	1			第Ⅲ期
	第14号竪穴住居跡	方 形	3.5×3.5				0	2				第Ⅰ期
	SI1 a 竪穴住居跡	方 形	5.2×4.9				0					
	SI1 b 竪穴住居跡	方 形	4.9×4.7	4	5		○(丸瓦)	2	1	0		
F地点	SI2竪穴住居跡	不 明	_									
(西斜面)	SI3竪穴住居跡	ほぽ方形	3.5×3.0				0				外周溝有り	
	SI4竪穴住居跡	長方形	7.0×(3.0)				0			0	外周溝有り	
	SI5竪穴住居跡	長方形	6.9×(4.6)							0		

※C地点の遺構期の年代は第 I ~ Ⅲ群土器の年代(32頁)に対応

表5 竪穴住居跡一覧

焼成した製品は出土遺物から平瓦と須恵器とみられるが、調査を一部の精査に留めているため詳細な比定は難しい。ただ、SR1では須恵器の出土量が多く、窯の構造も後述するように同じ頃のC地点の須恵器窯に類似していることから須恵器主体の焼成が考えられる。また、SR3では前庭部周りの堆積層 \mathbb{N} を含めて不良品の平瓦 \mathbb{I} B類 a 2夕イプが多量に出土しており、規模もSR1より大きいことから上記の平瓦を主に焼成していたとみられる。未精査のSR2は不明とせざるをえないが、SR3以上に規模が大きいことから平瓦主体の焼成を想定しておきたい。

ところで、部分的に精査をしたSR1では構造や規模・形状の詳細、SR3では廃絶後の2次的な使用などを捉えている。以下では、それらのことについて若干述べることにしたい。

- SR1の構造や規模・形状の概要は次のとおりである。
 - ア)直立する煙道をもつ地下式窖窯である。
 - イ)全長約7.9m、窯体は長さ約5.0m、幅約1.0mである。
 - ウ)焼成・燃焼部の境は平面的には不明瞭で、奥壁に向かって次第に幅が狭くなる。

- エ) 燃焼部床面はほぼ平坦、焼成部床面はやや直線的な23°の斜面をなす。また、奥壁が抉り込むように煙 道より少し奥まで掘り込まれている。
- オ)前庭部は膨らみをもつ方形で、焼成部より一段低い。焚口の両側に小さい土壙を持つほか、不規則な 凹凸がある。

カ)煙出しの斜面上方に外周溝を伴う。

これらのことからみると、奥壁や前庭部の形状、外周溝の存在などにSR1の特徴が窺われる。特に前庭部や外周溝については、C地点の第1·2·5号窯跡との類似が指摘できる(色麻町1993)。前庭部では平面形が第1·5号窯跡、不規則な凹凸がある点が第2·5号窯跡と類似しており、第5号窯跡にはSR1と同様に焚口の脇に小さな土壙もみられる(表4、第22図)。また、第2·5号窯跡は本窯跡群で外周溝が確認された数少ない窯跡の例であり、新たな例としてSR1が加えられる。以上の第1·2·5号窯跡は天平10年(738)前後頃の須恵器窯とみられており、SR1と同じ頃のものである。SR1のある本地区はC地点とは沢を挟むが、実際には200mほどしか離れていない。SR1にはC地点の須恵器窯との共通性が考えられる。

SR3廃絶後の2次的な使用は、精査部分の断面観察や拡張を通して捉えられた。SR3の天井が崩落してできた窪地に崩落土の除去による成形、底面の整地などの手を加えて使っている。精査した範囲が狭いため詳細は不明だが、壁の押さえとした平瓦の存在からも2次使用は間違いがない。なお、その押さえ方にも前述したC地点の第2:5号窯跡にみられる方法との共通性が認められる。

廃絶後の窯跡の2次使用についてはA地点の3号窯跡に例がある(宮城県1970)。3号窯跡では窯が使われなくなり、燃焼室の天井部が崩壊した後に、燃焼室と前庭部の窪地を利用して多量の平瓦 II B 類 a 2夕イプを貯蔵している。年代的にも S R 3と同じ頃の例であり、そうした用途も2次使用の一案としてあげられる。

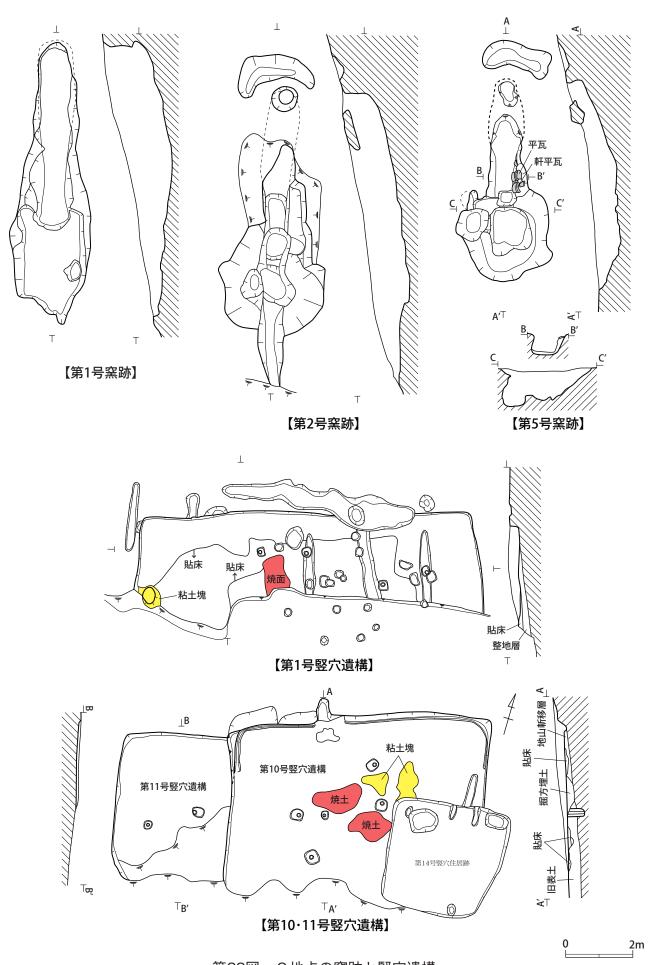
〔竪穴住居跡〕

確認面での平面形がほぼ方形のSI3と長方形のSI4・5がある。いずれも斜面の等高線に対して東・ 西辺を平行にして掘り込まれており、尾根側の東辺にカマドが設けられている。また、SI3・5では斜 面上方に外周溝を伴う。

方形のSI3は一辺が3.0~3.5mの小さい竪穴住居跡で、後述するSI4·5よりは窯跡から離れた場所に位置する。掘り下げを通じて四辺の壁やカマドの位置を捉えたが、床面が未精査のため内部施設の状況や性格は不明である。ただ、昨年調査した同じタイプのSI1bは床面でロクロピットや粘土塊を検出したことから工房と考えており、構造的にC地点の同じ頃の竪穴住居跡と共通性があることも指摘している(宮多研関連2009)。SI3でも同様のことが考えられる余地はある。

長方形のSI4·5はSR1窯跡のすぐ南側に位置する。東辺の長さが約7.0mあり、規模が大きいとみられるが、西辺が不明瞭で東西の規模は不明である。北半を精査したSI4では床面で大きな粘土塊を検出しており、SI5でも確認面ではあるが、粘土塊の存在を確認している。窯跡に隣接する立地と粘土塊の存在からみて、SI4·5は窯に伴う工房と考えられる。

ここで北半を精査したSI4の特徴を整理すると次のとおりである。



第22図 C地点の窯跡と竪穴遺構

- ア)確認された平面形が長方形で、斜面の等高線に対して長辺(東辺)を平行させて掘り込んでいる。
- イ)斜面下方の長辺(西辺)が不明瞭である。
- ウ) 長辺の長さが約7mで、規模が大きい。
- エ)床面に粘土塊がある。他にはカマド以外に内部施設がみられない。
- オ)掘方埋土が床面中央部に分布する。また、堆積土は斜面下方(西側)では平坦に堆積する。

粘土塊以外で注目されるのは、大きさのわりには内部にカマド以外の施設がみられないことである。主・壁柱穴がみられないことから上屋の状況は不明である。また、斜面下方の長辺(西辺)が不明瞭なことが注意される。多少は削られていることも考えられるが、地形をみる限り(第5·13図)、東壁と同等の高さの西壁を想定するのは難しい。さらに、掘方埋土が検出した床面中央部に分布しており、廃絶後の堆積土も灰白色火山灰層が典型的なように斜面下方の西側では平坦に堆積している。これらの特徴からすると、むしろ西壁は存在せず、上屋も存在しても簡易なものであることが考えられる。SI4には工房という遺構の1つの形態を示す可能性がある。

こうした遺構は本窯跡群ではやはりC地点で確認されている(色麻町1993)。C地点には表5に示した竪穴住居跡・竪穴遺構があり、竪穴遺構と標記された第 $1\cdot10\cdot11$ 号がア~エの点でS I 4と類似している(第22図)。それらについては竪穴住居跡の可能性もあるが、明確な柱穴が確認されないことから上屋のない作業場などの遺構として捉えられている(註7)。第 $1\cdot11$ 号では粘土塊も検出されており、その位置にもS I 4との共通性がみられる。

ところで、平面形が方形を基調とするものと長方形のものについて、窯跡や遺物との関係を示した ものが表6である。それによると、前者はC地点の各時期と本地区のすべてにみられるが、後者は須恵 器窯のみがみられるC地点の第Ⅲ期では確認されていない。そのことからすると前者は須恵器、後者 は瓦の生産と深く関連する工房であることが推測される。

〔その他の遺構〕

S K3粘土採掘坑跡は、西側の沢に近い斜面を掘り下げて粘土を採集したものである。S X1平場跡の下層で一部を確認したのみだが、西側を中心に広がるとみられる。採集後は地山土と炭の混合土で埋め戻されている。粘土採集という目的、埋土中の炭の存在からみて窯跡に伴うことは明確である。

S X1平場跡は、S K3粘土採掘坑跡の埋没後に黄褐色粘土を整地して造られており、S K3と同様に さらに広がるとみられる。上面には炭・焼土粒が分布しており、僅かではあるが焼成不良の平瓦 I A類 も出土していることから窯跡に伴う作業域と考えられる。調査面積が狭いため確認されなかったが、 平場(・窯)に伴う何らかの遺構が存在する可能性もある。

S K4·5土壙は長さ260cm前後、幅70cm前後の概ね長方形の土壙である。S R2窯跡やS I 5竪穴住居跡より新しく、別時期の遺構とみられる。人為的に埋められており、S K5では底面が平坦、横断面形が箱形を呈す特徴がみられたが、出土遺物はなく、詳細な年代・性格は不明である。

堆積層IVはSR3窯跡掘削時の整地層北側を覆う堆積層である。沢状に浅く窪んだ地形に沿って堆積しており、上面には堆積層Iにあたる黒色土が薄く認められる。北側では遺構がみられず、本地区の遺構は堆積層IVが堆積する沢状の地形によって限られていたと考えられる。

+14 _E	左	住居	跡·竪穴	貴構	窯	跡	遺物の様相		
地点	+ 10	方形	長方形	不明	数	製品	瓦	土器	
	第 I 期(8 c 初頭頃)	2	2		1	(瓦·須恵器)	_	第Ⅰ群	
C地点	第Ⅱ期(717~738)	1	1	1	(付近に存在)	(瓦·須恵器)	A群	第Ⅱ群	
	第Ⅲ期(738前後)	4		1	4	須恵器	B群	第Ⅲ群	
F地点西	8 c 第2四半期頃	2	2	1	3	瓦·須恵器	B群主体	第Ⅲ群主体	

※F地点西斜面の遺物はC地点の群設定に準じて記載

表6 竪穴住居跡等の形状と窯跡・遺物の様相

(3) F地点西斜面地区の様相

前節までの整理・検討を踏まえ、昨年度のF地点南半の成果と合わせて西斜面地区の窯場を概観する。昨年は西斜面地区でSI1・2竪穴住居跡、SD1溝、堆積層I~皿を検出しており(宮多研関連2009)、SI1・2と堆積層皿が同じ頃の遺構として位置づけられる(註8)。それらを合わせて、本地区の窯場には少なくともSR1~3窯跡、SI1~5住居跡、SX1平場跡、SK3粘土採掘坑跡、堆積層皿・IVがあることになる(第4図)。

立 **地**:北から南に「く」字状に延びる標高55~65mの丘陵西斜面に立地する。

- **範囲と規模**: 東を丘陵の尾根筋、西を南側から入る沢、南を堆積層Ⅲ、北を堆積層Ⅳで限られており、 規模は東西が40m以上、南北が約70mである。
- **構** 成:少なくとも3基の窯跡、5軒の竪穴住居跡、平場跡、粘土採掘坑跡で構成されている。竪 穴住居は工房、平場は作業域とみられる。
- 分 布 等:北側に窯跡、南側の斜面上方(尾根側)に竪穴住居跡、下方(沢側)に平場跡と粘土採掘坑 跡があり、分布状況からみて場が使い分けられている。また、窯跡は4~8mの間隔で尾 根側に煙出しを向けて並列し、南側の遺構は斜面上方から階段状を呈して認められる。 さらに遺構の多くは等高線に対してほぼ直交、または平行に掘り込まれており、全体的 に様相が整っている。
- 繁 跡:構造は地下式窖窯である。全長が約7.9mのSR1と約10.0~11.4mのSR2・3があり、SR1は主に須恵器、SR2・3は平瓦を主に焼成していたとみられる。平瓦は多賀城跡第I期でも新しい平瓦ⅡB類a2タイプが大部分をしめている。なお、今回の調査では窯跡から平瓦以外の瓦は全く出土していない。
- **竪穴住居跡**: 平面形が一辺3~5mの方形のものと長辺が約7mの長方形のものがある。前者は窯跡からやや離れて分布し、後者はすぐ近くに位置する。ともに精査したものを中心に床面に粘土塊がみられることから工房と考えられ、前者にはロクロピットもみられる。
- **平場跡など**: 西側の沢に近い場所に平場跡と粘土採掘坑跡がある。そこでは当初は粘土が採集されており、その後に平場跡が造成されている。
- **堆 積 層**:南の縁辺に堆積層Ⅲ、北の縁辺に堆積層Ⅳがあり、多くの遺物を含んで堆積している。 特に堆積層Ⅳは不良な平瓦を多量に含んでSR3窯跡の整地層を覆っている。
- 年 代:8世紀第2四半期頃の窯場とみられる。

以上のとおり窯場の立地、範囲、規模、遺構の構成や分布、各遺構の概要、年代が明らかになった。

西斜面地区の窯場のほぼ全容が捉えられたといえる。

範囲や規模、遺構の数からみると100m四方にも満たない小規模な窯場だが、粘土の採集から製品の成形と焼成、不良品の廃棄に至るまでの各過程の遺構で構成されており、場の使い分けが明確で、各遺構の並び方や向きも比較的揃っている。まとまりのある整った様相を持つ窯場といえる。焼成した製品の内容・年代もほぼ明らかで、多賀城跡第 I 期の瓦群の中でも新しい平瓦 II B 類 a 2タイプを中心に焼成をしていた窯場と位置づけられる。

ところで、前節までに述べたように本地区の出土遺物や窯・竪穴住居跡の構造などには、南から入る 沢を挟んで約200m西にあるC地点の窯場との類似・共通性がみられる。また、上記の平瓦と組む均整 唐草文軒平瓦660、細弁蓮花文軒丸瓦230・231は、本地区では軒平瓦が1点出土したのみであり、後述す る東斜面地区にもないが、C地点では軒平瓦を中心に同じ頃の窯・竪穴住居跡などから出土している。 ただし、その頃のC地点の窯跡は須恵器窯で、瓦は焼台や壁の補強に使われていたものである。それ らを実際に焼成した窯跡は近くに存在していたと考えられる。

以上のことを整理して列挙すれば、次のとおりである。

- ア)本地区の出土遺物、窯・竪穴住居跡の構造にはС地点との類似・共通性がある。
- イ)本地区とC地点は沢を挟んで約200mの近い距離にある。
- ウ)本地区では、瓦は主に平瓦 II B類 a 2タイプを焼成している。
- エ)同じ頃のC地点では須恵器を焼成している。
- オ) C 地点付近に本地区の平瓦と組む軒丸・軒平瓦を焼成した窯跡の存在が考えられる。
- カ) 東斜面地区では上記の軒丸・軒平瓦、平瓦は現段階ではみつかっていない。

アとイから本地区とC地点には関連性が窺われる。また、ウ~カの状況からみると、須恵器を焼成する窯場(C地点)、軒丸・軒平瓦を含めて焼成する窯場(C地点付近)、平瓦を中心に焼成する窯場(本地区)などが沢を囲むように近距離で存在し、1つのまとまりを持った大きな窯場を形成していた状況も想定される。その場合、主に平瓦の生産を受け持ったブロックが本地区の窯場ということになる。小規模ながら構成や配置などが良いこと、平瓦中心の出土遺物などの特徴も理解しやすい。

B. 東斜面地区

窯跡7基を確認した。遺物は確認面で多量の瓦のほか、須恵器が若干認められる。それらの遺構と遺物の詳細については、今回の調査が窯跡の存在確認を目的としたため明らかではないが、窯跡の立地や分布、構造や重複、堆積土の状況などの点で次のことが知られた。

- ・斜面が東側に張り出した場所に密集している。
- ・地下式窖窯や重複関係がみられる。
- ・西斜面地区と同じ黒色土に覆われており、その下に灰白色火山灰層がみられるものもある。

堆積土の様子が西斜面地区の窯跡と同様であり、少なくとも10世紀前葉頃以前の窯跡とみられるが、 立地や分布、重複などの状況は大分異なっている。また、遺構確認面で取り上げた遺物は表3、第19~21 図にあげたとおりで、桶巻き作りの技法による I 類の平瓦を中心に軒丸・軒平・丸瓦などの各種の瓦が ある一方で、西斜面地区では主体をしめる平瓦ⅡB類 a 2タイプがみられない。東斜面地区の瓦は多賀城跡第Ⅰ期の瓦群の中でも古い特徴をもつ瓦である。

以上のことから、同じ下地点でも東斜面地区の窯場は、西斜面地区とは異なる様相を持つことが想定される。その遺構・遺物の詳細、窯場の実態と年代、西斜面地区との関係などの解明については来年度の調査に期したい。

6. まとめ

A. 西斜面地区

- ① 窯跡3基、竪穴住居跡3軒、粘土採掘坑跡1ヵ所、平場跡1ヵ所、土壙2基のほか、堆積層IVを検出した。 昨年度の成果と合わせて窯場の立地、範囲、規模、遺構の構成や分布、各遺構の概要、年代が明らか になり、窯場のほぼ全容が捉えられた。
- ② 本地区の窯場は小規模なものであるが、粘土の採集から製品の成形と焼成、不良品の廃棄に至るまでの各過程の遺構で構成され、場の使い分けも明確で、各遺構の並び方や向きも比較的揃っている。まとまりを持つ整った様相を示す窯場といえる。
- ③ 窯場の年代は8世紀第2四半期頃とみられる。瓦は多賀城跡第 I 期の瓦群の中でも新しい平瓦 II B 類 a 2タイプを主に焼成している。
- ④ 出土遺物、窯・竪穴住居跡の構造などには西側の沢向かいにあるC地点との類似・共通性がみられる。また、C地点と周辺の状況も踏まえると、沢を囲むように近距離でいくつかの窯場が存在し、それらが1つのまとまりを持つ大きな窯場を形成していたことも想定される。その場合、本地区の窯場は主に平瓦の生産を受け持ったブロックとして捉えられる。

B. 東斜面地区

7基の窯跡を確認した。西斜面地区と同じ10世紀前葉頃以前の窯跡であるが、立地や分布状況、出土遺物などには相違がみられ、同じF地点でも異なる様相の窯場であることが予想される。

(註1)

各遺跡の出典は、昨年度の報告書『日の出山窯跡群 I』(宮多研関連2009)を参照のこと。

(註2)

なお、511 c タイプの顎面調整にはナデ調整のものと無調整のものとがあり、調整に先立つ叩き目が平行叩きの場合は無調整であるが(宮多研1982)、第19図3は平行叩き後にナデ調整がみられるやや特殊なものである。

(計3)

昨年度まで II B類、II C類として分類していた平瓦は実質的に同じ瓦とみられることから(宮多研関連2009註1)、本報告では II B類(a2タイプ)として扱うことにした。

(註4)

なお、重弁蓮花文軒丸瓦125についてはA地点の3号窯跡で焼成した後に、窯跡内に均整唐草文軒平瓦660が貯蔵された例が確認されていることから、それより若干古い程度のものとみられる。

(註5)

昨年度の報告書(宮多研関連2009)とC地点の報告書(色麻町1993)の分類は概ね通用する。

(註6)

全長は煙出し先端から前庭部末端までの距離で計測した。

(註7)

ただし、第10号竪穴遺構にはカマドや周溝がみられることから上屋がないとは断定できない。

(註8)

昨年、堆積層 \blacksquare は堆積層 I と同質の可能性を考えたが(宮多研関連2009)、最も南に位置すること、地山上に堆積して確認面では黒色を呈すこと、遺物が多いことなどの特徴は、最も北で検出し、上面に薄く堆積層 I がみられる堆積層 I と同じであり、それと同質とみられる。

引用•参考文献

大河原基典 2002 「多賀城創建期における瓦生産の展開」『宮城考古学』第4号 宮城県考古学会 佐川正敏 2000 「陸奥国の平城宮式軒瓦6282-6721の系譜と年代 - 宮城県中新田町城生遺跡と福島県及葉町郡山五番 遺跡・原町市泉廃寺-」『東北文化研究所紀要』第32号 東北学院大学東北文化研究所

色麻町教育委員会 1990 『郷土の誇る遺産 日の出山窯跡群』

色麻町教育委員会 1993 『日の出山窯跡群 - 詳細分布調査と C 地点西部の発掘調査 - 』色麻町文化財調査報告書第1集

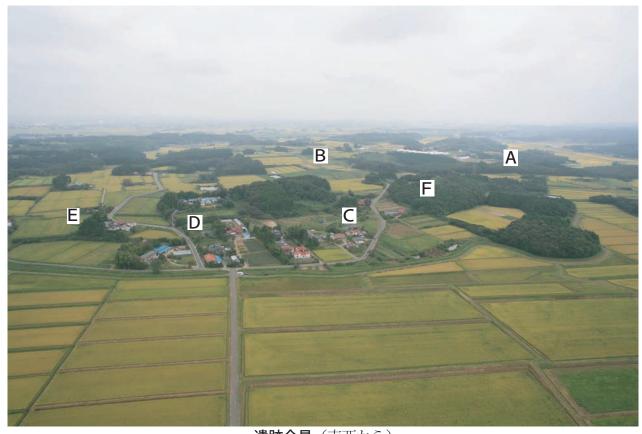
宮城県教育委員会 1970 『日の出山窯跡群 - 埋蔵文化財緊急調査概報 - 』宮城県文化財調査報告書第22集

宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政庁跡 図録編』

宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』

宮城県多賀城跡調査研究所 2008 『六月坂遺跡ほか』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第33冊

宮城県多賀城跡調査研究所 2009 『日の出山窯跡群 I 』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第34冊



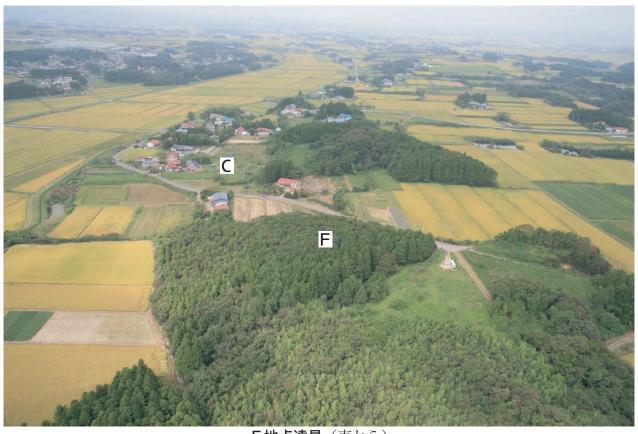
遺跡全景(南西から)



図版1 遺跡全景・遠景



F地点北側近景(北西から)



F地点遠景(東から)

図版 2 F地点遠・近景



全景及び堆積土断面 (西から)



検出状況(北西から)

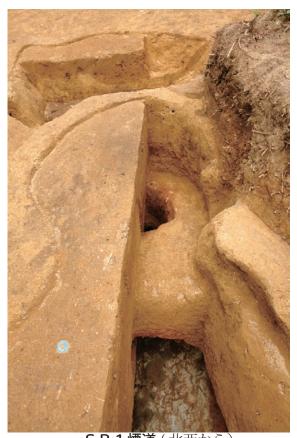


全景 (北西から)

図版3 SR1窯跡



SR1焼成部床面・残存天井(北西から)



SR1煙道(北西から)



SR2検出状況(西から)

図版4 SR1・2窯跡



検出状況 (南西から)



焼成部精査状況(南西から)



焼成部精査状況(東から)



整地直上堆積層Ⅳ瓦出土状況(北西から)



北壁の押さえ(南から)

図版5 SR3窯跡



窯跡南側の状況 (左からSI5、SI4、SX1:北から)



SI4とSX1(北西から)

図版6 **窯跡南側の状況** (S X 4・5 竪穴住居跡、S X 1 平場跡)



全景 (南西から)





一部精査状況 (西から)



カマド・煙道検出状況(南から)



カマド·煙道検出状況 (西から)

図版7 SI3竪穴住居跡



全景(北から)



検出状況 (北西から)





北西部粘土塊検出状況 (南から)



床面直上瓦出土状況(東から)

図版8 SI4竪穴住居跡







SX1·SK3断面(南から)



S X 1 平場跡 (北から)



S X 1・S K 3 断面拡大 (南から)

図版9 SI5竪穴住居·SX1平場·SK3粘土採掘坑跡



窯跡確認状況 (北東から)



窯跡5~7(東から)



窯跡確認状況 (南東から)

図版 10 東斜面地区

報告書抄録

ふりがな	ひのでやま	かまあとぐん										
書 名	日の出山	日の出山窯跡群Ⅱ										
副 書 名												
巻 次												
シリーズ名	多賀城関	多賀城関連遺跡発掘調査報告書										
シリーズ番号	第35冊											
編著者名	吉野 武	·廣谷和也										
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所											
所 在 地	〒985 - 0862 宮城県多賀城市高崎一丁目22番1号 電話 022-368-0102 FAX 022-368-0104											
発行年月日	平成22年	(2010年):	3月25日	3								
新収遺跡名	新名	が な 在 地	コー 市町村	ード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因			
ひのでやまかまあとぐん 日の出山窯跡群 (F地点)	宮城県加	くんしかまちょう 美郡色麻町		003	38度 31分	140度 53分	20090525	対象面積 約4,425㎡	学術調査			
(1 地杰)	大字堰堀2	20			00秒	00秒	20090723	調査面積 約 620㎡				
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な	遺構		主な遺	物	特記	事項			
日の出山窯跡群	窯 跡	奈良時代	【西斜面	面地区】	【西斜面地区】 西斜面地区の窯場の							
(F地点)	(8C前半)		窯跡	3	平瓦 Ⅱ B 類 a 2タイプ 重弁蓮花文軒丸瓦(型番125)			全容がほぼ明確に なった。多賀城跡第				
Ī.					エムボナ							
			竪穴住原 粘土採掘:					_				
			整穴住后 粘土採掘; 平場跡	坑跡 1		A·IB	(型番125) ・I C類	なった。多 I期の瓦群 新しい様相	の中でも			
			粘土採掘	坑跡 1	平瓦 I 丸瓦 II	A·IB	·IC類	I期の瓦群	の中でも の平瓦を			
			粘土採掘 平場跡 土壙	坑跡 1 下 1 2	平瓦 I 丸瓦 II 須恵器	A·I B [類 ß·土師智	·I C類 ·I C類	I期の瓦群 新しい様相	の中でも の平瓦を			
			粘土採掘 平場跡 土壙 【東斜區	坑跡 1 下 1 2	平瓦 I 丸瓦 II 須恵器	A·IB 類 ·土師器 ·本師と	·IC類 岩·硯 】	I期の瓦群 新しい様相 焼成してい	の中でも の平瓦を -る。			
			粘土採掘 平場跡 土壙	抗跡 1 下 1 2 訂地区】	平瓦 I 丸瓦 II 須恵器 【東彩	A·IB 類 *土師器 計面地区 類各種	·I C類 ·I C類	I期の瓦群 新しい様相	の中でも の平瓦を る。			
			粘土採掘 平場跡 土壙 【東斜區	抗跡 1 下 1 2 訂地区】	平瓦 I 東瓦 I 東京 I 東京 I 重弁蓮花二重弧	A・I B 類 計画地区 類 無 数	・I C類 器・硯 】 ・Ⅱ A類 (型番不明) (型番511)	I期の瓦群 新しい様は 焼成してい 東斜面地区 のを確認し	の中でも の平瓦を る。 では窯跡 存在する た。立地			
			粘土採掘 平場跡 土壙 【東斜區	抗跡 1 下 1 2 訂地区】	平瓦 [] 東瓦 [東瓦 [東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦]	A·IB 類 計一類 類 其 主 主 主 主 其 手 主 工 其 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五	・I C類 器・硯 】 ・Ⅱ A類 (型番不明) (型番511)	I期の瓦群 新しいで 東斜底してい 東斜のを強して のや分布状が	の中でもの平瓦をある。			
			粘土採掘 平場跡 土壙 【東斜區	抗跡 1 下 1 2 訂地区】	平瓦 I 東瓦 I 東京 I 東京 I 重弁蓮花二重弧	A·IB 類 計一類 類 其 主 主 主 主 其 手 主 工 其 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五	・I C類 器・硯 】 ・Ⅱ A類 (型番不明) (型番511)	I期の様に 取り が成し 東新密を確っ を かいし で の や がに と で の や り に し で り に り に り に り た り に り た り に り に り に り に	の中でもの平瓦をある。で存在の主流を立まます。			
			粘土採掘 平場跡 土壙 【東斜區	抗跡 1 下 1 2 訂地区】	平瓦 [] 東瓦 [東瓦 [東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦]	A·IB 類 計一類 類 其 主 主 主 主 其 手 主 工 其 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五	・I C類 器・硯 】 ・Ⅱ A類 (型番不明) (型番511)	I期の瓦群 新しいで 東斜底してい 東斜のを強して のや分布状が	の中で瓦 中で瓦。 で存た。出述区 な は在。出地遺とる			
			粘土採掘 平場跡 土壙 【東斜區	抗跡 1 下 1 2 訂地区】	平瓦 [] 東瓦 [東瓦 [東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦]	A·IB 類 計一類 類 其 主 主 主 主 其 手 主 工 其 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五	・I C類 器・硯 】 ・Ⅱ A類 (型番不明) (型番511)	I 期し成 の様で 東部でのや物にが 地し認状西あり はがが違い	の中で瓦 で存た、 面、窯す立土区なで なっこれ 選がる地 遺とるあ			
			粘土採掘 平場跡 土壙 【東斜區	抗跡 1 下 1 2 訂地区】	平瓦 [] 東瓦 [東瓦 [東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦] 東瓦 [東瓦]	A·IB 類 計一類 類 其 主 主 主 主 其 手 主 工 其 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五	・I C類 器・硯 】 ・Ⅱ A類 (型番不明) (型番511)	I 期し成 のかし 取様で 地し認状西あ持 ででした。	の中で瓦 で存た、 面、窯す立土区なで なっこれ 選がる地 遺とるあ			



多賀城関連遺跡発掘調査報告書第35冊 日の出山窯跡群Ⅱ

平成22年3月25日発行

発注者 宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城市高崎一丁目22番1号 TEL (022)368-0102 FAX (022)368-0104 印刷所 陽光社印刷株式会社